

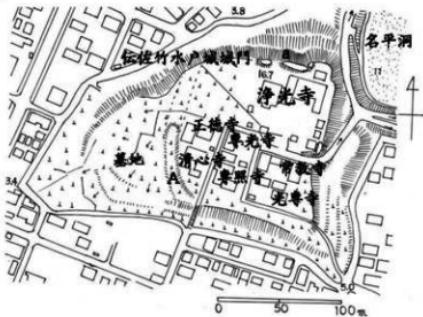
たてやまじょうあと
0334 館山城跡 ひたちなか市館山 現況：寺院、墓地

地図 37

那珂湊の市街地の北、浄光寺等が建つ標高 17m、比高約 13m の東西約 200m、南北約 120m の大きさの独立丘、館山にある。周囲は中丸川の開削した沖積地に発達し、当時は北東側以外の三方が湿地帯に囲まれ要害の地である。

丘上には 7 つの寺があり、周囲は墓地である。浄光寺本堂裏に土塁の残痕 a が残り、傾斜が緩やかな墓地になっている西側部分に堀 A が残る。

大様の末裔小泉左京亮重幹が平安末期に築いたとされ、戦国時代は江戸氏の城であったと思われる。那珂川の水運と鹿島灘の海運を管理していたと思われるが、川から遠いため、永禄年間に湊城に機能を移し廃城となつたのであろう。(『新編常陸国誌』) (青木)



館山城跡縄張図 青木義一 2021.2.14 (『茨3』より転載)

いしつかじょうあと
0336 石塚城跡 城里町石塚 現況：山林、畠地、宅地

地図 30

石塚城跡は、城里町役場から北へ 800m の標高 47m の台地の縁辺部に位置し、東西 500m、南北 200m の範囲に展開する。7 つの曲輪から構成され、字「御城」をもつ I が主郭と思われる。I・II の北側斜面に帶曲輪が見られる。I を囲むように曲輪 II・III・IV が配され、その外側に曲輪 V・VI・VII が展開する。I と IV の間の堀底道が旧茂木街道であり、大手は VI から III へ入る道であろう。一般国道 123 号桂常北バイパス整備に伴う発掘調査で、石塚城の外堀にあたると思われる堀跡等が検出したことから、その広がりを確認することができる。

築城は正平 17 年 (1362)、佐竹義宣の 3 男宗義によるとされ、以後石塚氏を称し、佐竹氏と行動をともにしていた。佐竹氏が常陸統一後の文禄元年 (1592)、石塚氏は片野城へ移されると、佐竹氏家老の東義久の子である義堅が城主となった。慶長 7 年 (1602)、佐竹氏が秋田へ国替えになると、石塚城は廃城となつた。(額賀)



石塚城跡縄張図 青木義一 (『改茨』より転載)

なかいじょうあと
0337 那珂西城跡 城里町那珂西 現況：山林、畠地、宅地、境内

地図 30

那珂西城跡は、那珂川と西田川に挟まれた標高 36m 程度の石塚台地南端に位置し、東西 280m、南北 450m の範囲に展開する。主に 3 つの曲輪から構成され、主郭となる部分は宝幢院の境内にあたる。周囲を堀と高さ約 3m 土壁に囲繞され、北西部分が大手口と考えられる。また南西隅は櫓台となっている。主郭の南側に「中城」と「兵庫坪」と呼ばれる曲輪が展開する。兵庫坪北西隅に現存する土壘は高さ 4m 程度であり、国道 123 号線からもよく見える。国道 123 号線の拡幅工事に伴う発掘調査（兵庫坪南西隅付近）では、南に延びる堀跡と屈曲して北西に延びる堀跡が確認されている。また、堀を埋めた後に帶曲輪として利用したことも確認されており、那珂西城の広がりを考える上で重要な知見が得られた。

築城は、大中臣系那珂氏による築城が有力であるが、詳細は定かではない。南北朝時代以後、徐々に佐竹氏の勢力に押されるようになり、最終的に佐竹氏の影響下に置かれることになった。佐竹氏時代に中城と兵庫坪部分が拡張整備されたといわれ、佐竹氏が秋田へ国替えとなった時点で、廢城になったといわれている。（額賀）



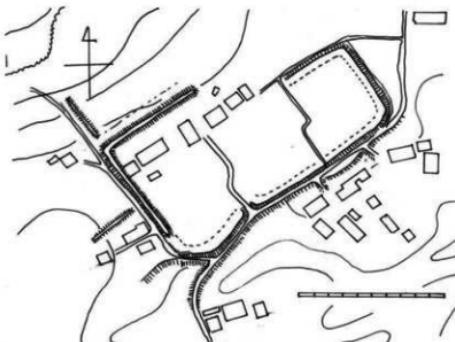
那珂西城跡縄張図 青木義一（『改茨』より転載）

はちまんやかたあと
0338 八幡館跡 城里町春園 現況：畠地、宅地

地図 29

八幡館跡は、春園神社の北西約 580m、標高 66m の山裾に位置し、東西 170m、南北 100m の範囲に展開する。個人宅の敷地および畠地の部分が一段高くなっている。北西部に高さ約 3m の土壘が L 字型に残っている。南側の道路沿いおよび東側の畠の境界には、土壘状の高まりがみられるが、耕作の影響も考慮すると確実に城郭に伴ったものとは断定しがたい。

築城年代については不明であるが、佐竹家臣八幡馬守の居館とされる。（額賀）

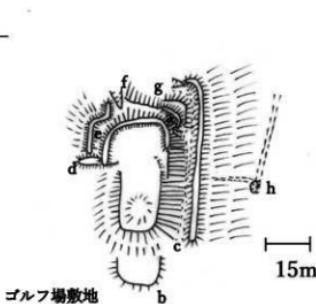


八幡館跡縄張図 青木義一 2003.1

かみさわやかたあと
0340 勝見沢館跡 城里町勝見沢 現況：山林、ゴルフ場

地図 29

勝見沢館跡は、勝見沢溜池から西田川に注ぐ支流の川と高取山から続く山塊の先端部で、標高65m 比高 50m に位置している。川崎春二の「奥七群城館図」によれば、主曲輪と東側に帶曲輪、南側に堀切を描いているが、実際には帶曲輪 a は土橋付き堀切で、南側の堀切 b はゴルフ場敷地になり 1 m 程度の段差になっている。また、a の先に馬出状曲輪 g がありさらにその下には横堀 c が存在する。この横堀は、かつて b を通り西側に巡っていたようである。堅土塁 d から再び横堀 e になり武者走り f を経て a に繋がっていたようである。また、川崎図には h から城に向かう道が描かれていたが、現在は完全に塞がれている。「水府志料」によると、「古館、りゅうがい」との記載があり、加藤伯耆守の館と伝わっている。子孫の兵庫の時に古内氏に仕えたといわれている。なお、麓には鎌倉權五郎景政伝承が残る鎌倉坂があり、城との関連が指摘される。(五十嵐)



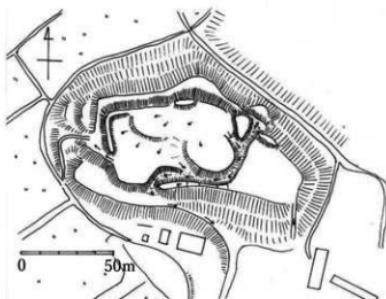
勝見沢館跡縹張図 五十嵐雄大・青木義一
2022.11.23・2023.1.10

えちごかたあと
0341 越後館跡 城里町小坂 現況：山林

地図 29

越後館跡は、西田川の北側、城北小学校より西へ 1 km 程離れた標高 82m の山林位置し、東西約 140m 、南北約 60m の範囲に展開する。主郭部と思われる部分は、東西 50m 、南北 35m 程度であり、内部は段差により隔てられている。北西部および北側の一部に土塁が残存し、北東部には土壇状の高まりが見られる。また北西側斜面には帶曲輪が配されている。土壇より東側は堀により区画されており、曲輪が展開する。南側については、改変を受けており、本来の姿をとどめていない可能性がある。東側より登る道が登城道であり、西側に延びるものは搦手と考えることができる。

越後館の築城時期については不明であるが、上杉氏の家臣が築いたと伝えられている。(額賀)



越後館跡縹張図 青木義一 2009.3

りゅうがいじょうあと
0342 龍崖城跡 城里町上入野 現況：山林 別称：上入野城、入野城

地図 29

龍崖城跡は、藤井川ダムの北側、小松寺の背後にあり標高145mの白雲山に位置し、東西約250m、南北約500mの範囲に展開する。山頂部の曲輪Iは長軸60mの規模を有し、堀に包囲され、北西、東に土塁が残る。南北に虎口状の入り口があり、北側には櫓台のようなものが見られる。Iより三方に延びる尾根に曲輪II・III・IVが展開し、それぞれの曲輪に土塁や腰曲輪が見られる。Iより北側の尾根を進むと堀切が見られ、途中で北西に屈曲して進むと曲輪状の遺構が見られる。さらに、堀切により区切られた尾根の最先端は出丸状の遺構が見られる。北側の山麓に根本、宿城などの城郭関連地名が残されており、この城郭との関連もうかがえる。

築城については、『東茨城郡誌』に常陸大掾平義朝の次男盛幹が建久年間にはじめて城を築き、龍崖丹波守と称したことが記される。天文年間に佐竹氏と江戸氏の抗争が入野郷で繰り広げられていたことがあり、龍崖城跡も重要な拠点であった可能性がある。(額賀)



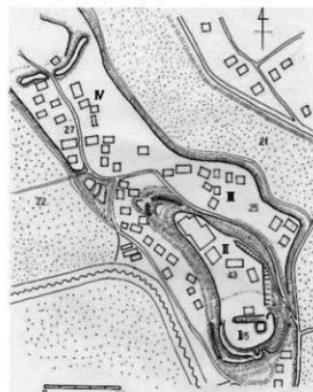
龍崖城跡縄張図 余湖浩一-2004.12
(『続茨』より転載)

おおやまじょうあと
0343 大山城跡 城里町阿波山 現況：山林、畑地、宅地

地図 24

大山城跡は、那珂川右岸、桂川が屈曲した周囲の水田で囲まれた、標高42mの独立丘陵上に位置し、長軸480m、短軸180mの範囲に展開する。I・IIの部分を「館山」と呼び、南北250m、東西90mの範囲である。Iの南側が大手道と思われ、虎口状の遺構が見られる。また、南西斜面には横堀、曲輪内には櫓台と思われる部分が見られる。IIは現在ホテルが建っているが、堀に仕切られた複数の曲輪が存在していたようである。北西側には横堀状の堀が見られる。III・IVの微高地も曲輪の一部として考えられ、微高地を遮断するような土塁も残っている。

長承元年(1132)常陸大掾氏の家臣鈴木五郎高卿が館山に城を築いたといわれ、南北朝期に佐竹義宣の子義孝がこの地を支配し、大山氏を名乗った。以後大山氏の居城として機能し、大山氏が小場城・小高城に移った後に廃城になったという。(額賀)



大山城跡縄張図 青木義一-2007.2

たかくやかたあと
0344 高久館跡 城里町高久 現況：山林、畑地、墓地 別称：八幡館

地図 29

高久館跡は、那珂川左岸の標高 55m の台地上に位置し、東西 280m 、南北 750m の範囲に展開する。主要部は東側を不動谷津、西側を八幡沢に挟まれた台地の先端にあり、遺構が見られる。現在、館集落共同墓地となっているいる曲輪 I をはじめ南側に曲輪 V 、北側に曲輪 II 、 III 、 IV が配置されている。宅地化などにより、遺構が見られなくなってしまった部分もあるが、 I と II を区画する堀や IV の北側に見られる堀など、見事な遺構が見られる。また、字寄居には東西方向の堀跡がみられ、この部分までを含めると、広大な範囲が城内として考えることができよう。

高久城は、佐竹行義の六男の馬渢小三郎景義が高久の地に移り住んだ後に高久氏を名乗ったことに始まる。佐竹の乱においては山人氏に属したことから大山氏に攻められている。また天文期には、義篤に背いた際にも城を攻められ敗走している。(額賀)



高久城跡縦張図 高橋宏和 2017.1.19 (『続茨』より転載)

しもあくつやかたあと
0345 下坪館跡 城里町下坪 現況：山林、宅地、墓地 別称：樺山

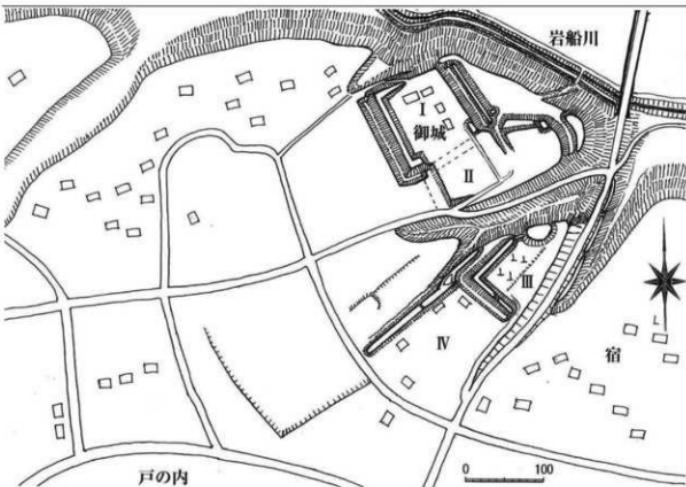
地図 30

下坪館跡は、標高 25m の那珂川右岸の氾濫原による沖積低地に位置する。館跡は、字「堀の内」の島状にある山林の中にある墓地周辺にみられ、堀切らしきものが見られる。昭和 22 年の航空写真を確認すると、この山林の他に南側に方形の区画を確認することができ、その範囲は、東西 120m 、南北 220m になる。館としてはこの部分も含めて考えるべきであろう。『桂村郷土誌』によれば、南側の入口を「大門」、北側を「八幡平」と呼んでいるようであり、山林部分が「八幡平」であろう。

明確な築城年代については不明であるが、佐竹義篤の 3 男宗義が、石塚氏を称した後に設けた館とされている。宗義が石塚城に移った後は、その臣下である桐原勘解由左衛門が住んだといわれているが、詳細については定かではない。(額賀)



下坪館跡周辺図 五十嵐雄大



孫根城跡縄張図 余湖浩一『改茨』より転載

孫根城跡は、桂川支流の岩船川を北側に臨む標高 55m の台地の縁辺部に位置し、東西 250m、南北 240m の範囲に展開する。曲輪 I・II が主郭部分と思われ、「御城」の字名を残す。かつては I を囲繞していたようであるが、一部埋められてしまったようである。現在は、北東面と南西面に遺構が見られ、特に南西面は土塁の残存状況が良好であり、土塁の高さは 5m 程である。『重要遺跡報告書 II』には、さらに外側に土塁が存在していたことが描かれており、堅固であったことがうかがえる。沢を挟んだ南東側には、曲輪 III・IV の展開が見られる。一角に墓地がある III は、西側を L 字の堀と土塁によって区画されている。この堀は北側および東側に延びる支谷につながっていたと思われる。III の南西側に位置する IV については、II と III を隔てる支谷沿いに土塁が残された空間になっており、かつては寺院が存在していたという。現在現地に残されている主要な遺構は以上となるが、IV の南西延長には「戸の内」とよばれる一帯があり、III の支谷を挟んだ東側には「宿」地名が残されている。

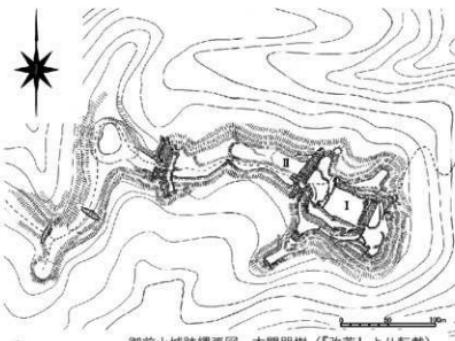
築城年代は定かではないが、大山氏二代大山義道によって築城されたといわれており、義道の長男義兼が居城し、孫根氏を称したといわれている。大山氏は弟の義定が 3 代となっている理由について、「水府志料」によると、「義兼多病なるに因りて孫根に居らしむ」とあり、病気を理由に義定が家督となつた。延徳 2 年(1490)、佐竹義舜は一族の山入義藤・氏義父子に太田城を攻略され、外祖父である大山義長を頼り孫根城に入った。明応 9 年(1500)、山入氏は再び義舜を攻めることになり、孫根城に攻め寄せてきた。義舜は孫根城から金砂山城に逃れ、籠城することになる。永正元年(1504)には、太田城の奪還に成功し帰還している。(額賀)

ごぜんやまじょうあと
0348 御前山城跡 城里町御前山 現況：山林、墓地

地図 24

御前山城跡は、那珂川に面した標高 156m の御前山の東の突端部分に位置し、東西 400m、南北 170m の範囲に展開する。主郭と思われるは I の部分であり、東西には堀、南側が帶曲輪状の段が残る。西側に進むと、尾根を遮断するように高さ 2.5m の土塁と堀が見られる。曲輪 II 部分は細長い尾根を利用した曲輪であり、西端は尾根を遮断するように堀と土塁が配されている。さらに西側の山頂に向かうと、堀切状の遺構が 2 つ確認できる。

築城については、承久年中（1219-21）に閑白藤原道兼の子孫である藤原時房が築いたといわれ。その他に、南北朝争乱時に楠木正家の軍がこの地に立て籠もったこと、応永年間（1394-1428）に今宮大納言永義が在城したことなど、数多くの伝承が残されているが、詳細は定かではない。那珂川対岸には野口城（常陸大宮市野口）があり、連携して機能していた可能性がある。（額賀）



御前山城跡縄張図 本間朋樹（『改茨』より転載）

にたんだじょうあと
0349 二反田城跡 城里町小勝 現況：山林、墓地

地図 29

二反田城跡は、藤井川左岸の標高 174m の尾根の突端に位置し、東西 130m、南北 160m の範囲に展開する。ほぼ主郭のみの構造となっており、ビーグより北側の尾根には堀切が見られる。西側から南側にかけて横堀があり、その外側には土塁が見られる。さらに外側には土塁に沿うように帶曲輪の遺構が見られ、南側の尾根は腰曲輪が連なる。帶曲輪状の遺構の北端には堅堀のような遺構が現存し、尾根のくびれでいる部分を通って、西側へ移動していたと考えられる。

築城年代や城主についての伝承はなく、物見としての役割を果たしていた可能性がある。また、ここより 360m 離れた藤井川対岸には方とや城跡が存在し、連携して機能していた可能性も指摘できよう。（額賀）

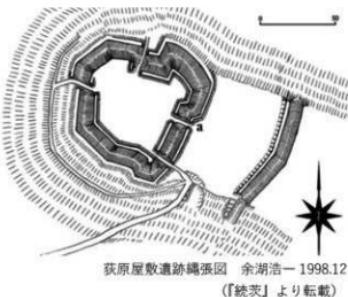


二反田城跡縄張図 青木義一 2019.1

おぎわらやしきいせき
0350 萩原屋敷遺跡 城里町徳蔵 現況：公園 別称：萩原長者屋敷 地図 29

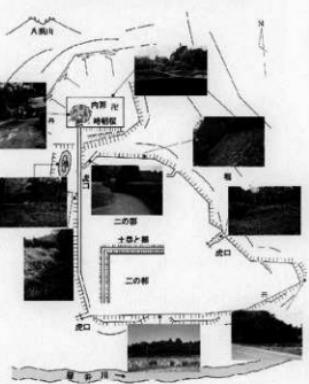
萩原屋敷遺跡は、藤井川右岸、徳蔵郵便局より320m南側の標高168mの尾の先端に位置し、東西150m、南北80mの範囲に展開する。ほぼ主郭のみの構造となっているが、東側には尾根を分断するように堀切が設けられている。周囲に幅6m、深さ4mほどの横堀が設けられており、北西以外には土塁も現存する。各所で折れや横矢掛がみられ、複雑な構造となっている。虎口が3箇所確認でき、北虎口は横矢の張り出し部分が見られ、しっかりしたつくりになっている。公園化に伴い、発掘調査を実施しているが、繩文時代前期から中期後葉のもの遺物がほとんどであり、城館に関連するものは検出されなかった。

築城年代や城主については不明であるが、豪族大峰武郷が後に萩原と改姓したといわれている。また、武郷の娘徳蔵姫が布教に来た弘法大師空海に恋慕したが成就することなく身を投げたとする悲恋伝説が残る。(額賀)



とくらやかたあと
0352 戸倉館跡 城里町徳蔵 現況：山林、学校、寺社境内地 地図 28

戸倉城跡は、城里町徳蔵にあり、徳蔵寺からのびる舌状台地上に位置する。城跡の大半は旧七会村立西小学校の敷地となっており、現存する遺構はあまり見られず、わずかに虎口跡と思われる部分が見られる程度である。校舎建設に伴い発掘調査を実施しており、小学校建設前には、校庭部分に堀と土塁が現存していたようである。3つの曲輪から構成されていたと考えられ、台地の先端部分にあたる校庭部分が三の曲輪(郭)、校舎部分が二の曲輪、そして、徳蔵寺の部分が一の曲輪(内郭)である。発掘調査では、三の曲輪部分に薦研堀をはじめ、土塁、井戸跡、竪穴構造、掘立柱建物跡等が発見され、出土遺物として、国産陶器(天目茶碗、おろし皿、常滑焼)、内耳鍋、かわらけ、石製品(茶臼、石臼)などがみられる。築城年代は不明であるが、出土遺物の年代から室町時代には存在していたことが推測できる。城主は、笠間盛朝の二男朝朝が「戸倉三郎」を名乗り、徳蔵に居を構えたと言われており、戸倉氏が代々務めたものと思われる。(額賀)



戸倉館跡概念図(七会村埋蔵文化財発掘調査報告書
第1集『戸倉館跡』より転載)

ふるうちじょうあと
0355 古内城跡 城里町下古内 現況:山林

地図 29

古内城跡は、藤井川が蛇行する標高 120m～140mの清音寺の裏山に位置し東西 320m、南北 320mの範囲に展開する。明確な曲輪として認識出来るものは見られないが、尾根を遮断するような堀切が 5 か所で確認されている。清音寺の全面には「宿」地名が見られ、石塚から笠間方面に抜ける笠間街道の街道筋にもなっている。

古内城については、史料上でその存在をうかがわせていたが、場所については長く不明であった。史料では「古内宿の城」が火災にあった事が記載されていることから、清音寺を含めた周囲が古内城であった可能性がある。文和元年(1352)、復庵宗己の中興以後、清音寺は二度の兵火にあっており、そのうちの一回が「古内宿の城」の火災の影響であると考えられよう。(額賀)



古内城跡縄張図 五十嵐雄大 2022

ふもとじょうあと
0357 麓城跡 笠間市笠間 現況:宅地、寺社境内地

地図 35

麓城跡は、洞沼川左岸、笠間稻荷神社北側周辺に位置し、笠間稻荷神社を取り囲むような城館跡となる。近世の絵図によると、現在の笠間稻荷神社を取り囲むように堀と土塁が配されていたことが確認でき、現在も土塁の一部を見ることができる。堀については、用水路の一部として残存しており、往時の姿をうかがうことができる。

明確な築城者は伝わっていないが、『笠間城記』によれば、「軍營を三白山の南麓に構え、塁を高くして、溝を深くして之に居る、今之鷹匠町及座頭町背の土塁は古の軍營の跡なり、塁外の溝池は古は舟を浮べ、麓城と称せり」とあることから、時朝の軍營として築かれた後に、居館として機能していたと考えられる。現在の笠間城が山城部分として機能していたのであれば、麓城が平地居館として維持されたものと推測できるものである。(額賀)



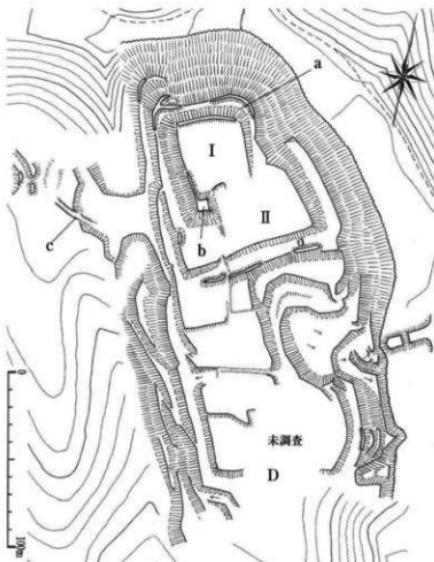
麓城と考えられる絵図の様子(部分「笠間城と城下絵図」笠間市教育委員会蔵)

飯田城跡は、笠間城跡の北東3.7km離れた、飯田川の右岸の標高約110mの峰上に位置する。峰は南北に細長く、北側東側は現在水田となっている谷が入り込み、西側は谷津が入り込み、となりの峰が続いている。

遺構は、峰のピーク付近に曲輪Iが展開し、南西隅に高さ5~6mくらいの櫓台bが残存する。曲輪Iの北側斜面には、横堀aと土塁が一部残存している。南側に曲輪IIが梯郭式に配置され、その南側にも帶曲輪状の遺構が確認され、一部土塁が残されている。曲輪IIの南頭側には、東側よりアクセスできるような遺構配置が見られるが、詳細については不明である。これ以外にも、曲輪状の遺構が現存しており、この尾根上を利用した城郭であることは間違いないと思われるが、盛んに烟作が行われた影響により改変が行われていることと、藪が繁茂していることから、Dより南側の現状が確認できない。

縄張図等に描かれていないが、飯田城本体の西側の尾根およびその西側の尾根には、堀切が見られ、飯田城と関連した遺構であることがうかがえる。また、西隣の尾根では発掘調査が行われ、尾根を分断する堀切の状況および、尾根西側の尾根筋に添うように堀が巡らせてある状況が確認されたことにより、飯田城の広がりの一端について確認することができた。尾根間を移動できるように通路らしきものも見られることから、西側にある尾根についても、敵側の侵入も意識して防御施設を構築したものと推測できる。

『大日本國誌・常陸國』によると、飯田城には江戸氏家臣である外岡美濃守なる人物が居城としていたことが記されている。また、『笠間城記』や『聚集笠間誌』には、笠間朝貢の家臣大嶺広基が飯田の前原に陣屋を構え、文明年中の広泰の時代に前原の陣屋を猿田嶺に移したことある。「前原の陣屋」の推定地は、飯田城の南側の水田地とされ、「猿田嶺」に移された「陣屋」は、この飯田城のことを指すと考えられる。(額賀)



飯田城跡縄張図 岡田武志 2015.2.1 (『続城』より転載)

かさまじょうあと
0356 笠間城跡 笠間市笠間 現況：山林、公園、寺社境内地 別称：桂城 地図 35

笠間城跡は笠間市の北部、佐白山上に立地し、独立丘陵の西端部の複雑に入り込む浸食谷により形成される尾根を巧みに利用する山城である。西麓に近世城下町が展開し、町を取り囲むように涸沼川が流れている。この涸沼川によって、城下町の内と外に分かれている。

現在把握されている笠間城跡は、近世の城跡のことを指す。これらについては、正保2年(1645)の「正保の城絵図」のような近世絵図でも確認できる。標高 207m、現在は佐志能神社が鎮座する佐白山山顶周辺に天守曲輪が展開し、現存する石垣が見られる。かつては天守櫓が存在しており、佐志能神社の拝殿はこの櫓を利用して造られたと言われている。また、北西斜面には、腰曲輪群が見られ、堅固な状況が見て取れる。天守曲輪の西方には、標高 182m付近には本丸が展開する。約 6000 m²の敷地には、南側に鍵型の大土壘が残存し、天守曲輪への入り口や玄闕門に門の礎石が現存する。かつて、大土壘には八幡台櫓、本丸東端の尖端には穴ヶ崎櫓が存在し、櫓の礎石が現存している。本丸の北西には二の曲輪が展開する。わずかに土壘を残し、二の曲輪北西の塹地は当時のままである。二の曲輪北西側には帯曲輪が展開する。近世の絵図では、ロータリーに近い部分を「三曲輪」と記載しているものがある。曲輪間を行き来できるような通路跡と思われるものも現存する。帯曲輪の東側には、大手門があり、その前面には的場丸が展開する。笠間城入城の正規ルートであり、大手門は枠形を形成し、的場丸とは堀によって区切られる。大手門の背後には石垣が展開する。本丸南西の斜面から西側の尾根にかけて、L型に堀跡が見られる。

近世の絵図で把握されている笠間城以外にも、周辺の尾根等に城郭遺構が現存する。これらについては、中世の笠間城の名残であると考えられる。まず、帯曲輪北西側の尾根筋には、小段状の曲輪が続き、最北西側の曲輪には、先端部を囲うようにコの字の土壘と空堀が見られ、土壘南側には、虎口と思われる遺構が見られる。さらに鍵型に尾根が続き、空堀の外側には堀切が配されている。近世の絵図では、侍屋敷として描かれている。的場丸の北側の標高 153m のピークを中心とした場所には、かつて正福寺が配されていた。ピーク周辺の方形区画をはじめ、現在も伽藍跡と思われる遺構が残されるが、北側の帶曲輪等は中世城館の名残であると考えられる。さらに、これらを取り囲むように配されている堀跡は、防衛施設として考えられる。的場丸の北東側、正福寺跡の向かいの標高 141m 周辺にも、城郭遺構らしきものが見られる。ピークの曲輪にはわずかに土壘らしき高まりが見られ、南側には人為的に造作された腰曲輪状の小段が続く。この間にあらわる谷地形は、敵の侵入の際に横矢が掛けられるように、連続した腰曲輪が配置されている。この部分の一部についても、近世の絵図には侍屋敷として描かれている。

このように、近世笠間城の周辺をよく見ていくと、腰曲輪群や堀跡など多くの遺構が見られる。こうした遺構群については、近世城郭として笠間城を整備した時点で造作されたというよりは、中世笠間城由来のものを引き継ぎ利用していると思われる。そして、「正保の城絵図」に城郭として描かれていない部分に残されている城郭遺構については、近世城郭化する中で使用されなくなってしまった部分に、寺院や侍屋敷を配して、再利用されたものと推測できる。

笠間城は、笠間時朝による築城の伝承をもち、中世は主に笠間氏の居城として整備され、笠間氏没落後は宇都宮氏家臣の玉生氏、蒲生郷成によって整備されていったものと考えられる。近世になると、笠間藩の居城として使用され、城郭としては「正保の城絵図」の範囲に限定されていたのであろう。(額賀)



笠間城跡
周辺図
(笠間市
教育委員
会提供)

0359 本戸城跡 笠間市本戸 現況：山林 別称：本殿城、田利城

地図 34

本戸城跡は、JR 水戸線稻田駅から南へ約 1km、本戸字田利の御城と呼ばれる新立山の山麓舌状地に位置する。遺構は、この台地上に、鍵型の一つの曲輪（郭）の手前に二の曲輪、三の曲輪が展開する。一の曲輪の周囲は土塁で囲まれており、同様に二・三の曲輪にも土塁が残存する。周囲には、段状に帶曲輪、腰曲輪が見られ、堅固な状況が見て取れる。周辺には、「井戸沢」「屋敷下」「駒込」「小屋」などの城郭関連地名も残っている。

本殿跡三郎高朝の居城であるといわれており、室町時代前期にはその原型があったものと推定できる。本殿氏は、笠間盛朝の三男高朝が本殿氏を称したことから始まり、南北朝争乱期には、南朝方に与していた笠間氏とともに行動していたと推測される。その後の消息は不明であるが、天正 18 年（1590）に笠間氏が没落するまで、行動をともにしていたものと考えられる。笠間一族がおさえる支城の一つであり、役割についても大きかったものと推測される。（額賀）



本戸城跡概念図（『笠間市史』上巻挿図を再トレースし一部加筆）

0362 上加賀田城跡 笠間市上加賀田 現況：山林

地図 35

上加賀田城跡は、北と東を洞沼川、①
南と西を水田に囲まれた標高 56m の
独立した小丘陵に立地する。小丘陵の
一番北側が主郭部となり、南に向かう
につれて、二の曲輪、三の曲輪が続く。
土塁や堀などがめぐっていたが、耕作
などの影響により、現在はその一部が
見られる程度である。それなりの規模
を有していたことが想定でき、河川や
水田を巧みに取り込み利用した城郭
であると考えられる。北側東道建設に
伴い、城跡北斜面地において発掘調査



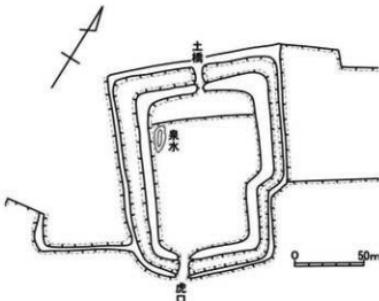
上加賀田城跡概念図（茨城県教育財團文化財調査報告書第 272
集『向原遺跡 小畠遺跡 上加賀田城跡』より転載）

が行われたが、城郭に関連する遺構は
発見されなかった。城跡周辺には、「御城」「北古屋」「古屋」「表」「堀ノ内」などの城館関連地名
が残っている。築城時期や城主については不詳であるが、穴戸氏関係の城郭であると推測できる。
中世は、上加賀田、下加賀田あわせて「加賀田」と呼ばれており、穴戸氏の支配下であった。上加
賀田地区の北側は、本戸地区、南吉原地区が隣接しており、中世は笠間氏の支配領域であったこ
とを考えると、笠間氏と穴戸氏の支配領域の境目となる。（額賀）

かないまえひがしたであと
0363 金井前東館跡 笠間市金井 現況：宅地

地図 35

金井前東館跡は、涸沼川左岸、笠間カントリーゴルフクラブがある台地の南端に位置し、東西 120m、南北 150m に展開する。個人宅の周囲を囲むように土塁と堀が回続し、北側には土橋状の遺構がみられ、南側が虎口であると考えられる。土塁の規模は高さ 3~5m、堀幅は最大で約 6m ある。築城年代は古代末~中世初期といわれており、城主伝承については不明である。しかし『笠間市史』上巻によると、「中世土豪寺崎氏の関係」とあり、笠間氏の家臣として活動し、笠間氏没落後には佐竹氏に付き従った寺崎氏との関わりも考えることができよう。続きの台地上にある西館との関連性もうかがえ、「打手(うって)」と呼ばれている。(額賀)



金井前東館跡概念図（『笠間市史』上巻の挿図を再トレイス
し一部加筆）

かないまえにしたあと
0369 金井前西館跡 笠間市金井 現況：宅地

地図 35

金井前西館跡は、涸沼川左岸、笠間カントリーゴルフクラブがある台地の南端に位置し、東西 120m、南北 150m に展開する。前述した東館よりさらに 120m 程西側に位置する。個人宅の周囲を囲むように土塁と堀が残存し、北側奥には稲荷社があり、さらに北には土橋状の遺構がみられる。南側の虎口からは、涸沼川流域に開けた耕作地を一望することができる。築城年代は古代末~中世初期といわれており、城主伝承については不明であるが、東館同様に、寺崎氏との関わりも考えることができよう。東館と同等規模の館跡であり、関連性もうかがえ、一連のものとして捉える事もできよう。「台(だい)」と呼ばれている。(額賀)



金井前西館跡概念図（『笠間市史』上巻の挿図を再トレー
スし一部加筆）

いちはらじょうあと
0370 市原城跡 笠間市下市原 現況：山林、畠地 別称：市原館

地図 35

市原城跡は、涸沼前川右岸の標高 105m の小高い山に位置し、東西約 500m、南北約 250m の範囲に展開する。遺構は山頂部の「館の台」と呼ばれる部分と、その麓にあたる標高 65m の「御城」付近にみられる。山頂部では南北に曲輪が分かれており、切岸、土塁、腰曲輪が残されている。「御城」付近はかつて土塁等がみられたと思われるが、現在は耕作などの影響でその姿を見ることはほぼできない。しかし、御城をはじめ、外城・公方・屯居・登城坂・源平坂・北小屋などの城郭関連地名が残っている。また、正護院、成就院といった寺院跡があり、城郭周辺の景観を復元することができよう。



市原城跡縄張図 青木義一

具体的な築城年代については不明であり、城主についても不明である。しかし、『友部町史』では、市原四郎兵衛、市原駿負、市原彈正といった人物を可能性として挙げている。(額賀)

おばらじょうあと
0371 小原城跡 笠間市小原 現況：畠地、宅地、寺社境内地

地図 35

小原城跡は、涸沼前川の左岸、標高 44~46 m に位置し、東西約 400m、南北約 500m の範囲に展開する。御城稲荷神社が鎮座する方形区画が本丸跡と考えられ、最大 5m の高さの土塁が残されている。また、本丸跡の南西側や、字精進場・字古内などの一部には堀と土塁が現存している。かなり大規模な平城であったと推測できるが、耕作などの現代までの影響により、そのすべての姿をうかがうことはできない。行者遺跡の発掘調査により、B 付近では城郭に関連すると思われる堀跡が見つかっている。



小原城跡縄張図 五十嵐雄大 2016.11.1 〔続実〕より
転載)

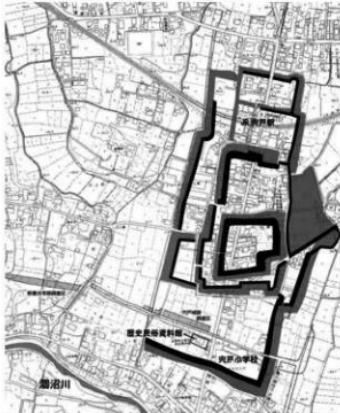
永享元年(1429)、手綱郷(高萩市)地頭の里見家基が依上城(大子町)攻めの功により、足利持氏より那珂西郡の地を与えられ、家基の弟満致(俊)を小原の地に置いたとされる。小原城もこれ以後に成立したと考えられる。廣慶寺は里見氏開基と伝わっており、里見氏が城主である痕跡の 1 つとして考えられる。(額賀)

ししどじょうあと
0372 宍戸城跡 箕面市平町 現況：水田、畑地、宅地、寺社境内地

地図 35

宍戸城跡は、JR 宍戸駅の南側、潤沼川左岸の標高 26~30m の沖積低地上に立地する。城域は、宍戸駅北側 100m から宍戸小学校南側までである。宍戸城の縄張は、「宍戸城絵図」や現地に残された遺構で確認することができ、現在の旧陣屋コミュニティーセンターの南側一帯が本丸跡である。現在見られる遺構は、本丸跡周辺にわずかに残る土塁や、田の区画として確認できる堀跡がある。発掘調査の成果より、城域の南側の武家屋敷部分では、建物跡、池跡、柵列跡、区画溝などが確認されており、出土遺物として、陶器、かわらけ、木製品などが見られる。こうした遺構は、概ね 17 世紀前半のものであり、秋田実季が宍戸藩に封ぜられた際に整備されたものと判断できる。しかし、秋田氏入封直前の堀跡が確認されている事から、戦国期の

宍戸氏および戦国最末期の佐竹氏段階の城郭の存在を示すものとして推測できる。(額賀)



宍戸城跡想定図（茨城県教育財団文化財調査報告書第 256 集『新善光寺 宍戸城跡』第 158 図に加筆）

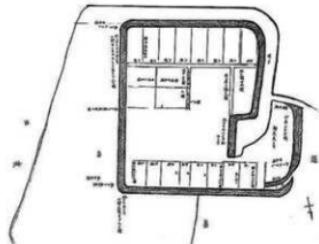
ふるだて
0373 古館 箕面市橋爪 現況：水田、畑地、宅地

地図 35

古館は、潤沼川北側の微高地上に位置し、東西 160m、南北 150m の範囲に展開する。現在、現地においては目立った遺構を見ることはできず、宅地化や耕地化の影響を受けていると思われる。詳細な築城年代および築城者については不明であるが、秋田氏の時代には、家臣の組長屋が置かれていた。宍戸城絵図に描かれており、古館のことと描いている絵図も存在する（「秋田氏文書」東北大学附属図書館蔵）。

平成 30 年度、個人住宅の発掘調査によって、古館の堀跡と思われる溝が確認されている。出土位置からすると、古館の東側の溝であり、逆台形を有している。龍泉窯の青磁や古瀬戸の花瓶と思

われる破片等が出土しており、中世のものであることは確実であり、15 世紀まで遡る可能性がある。古館という名称からも、宍戸氏に関わるものとして考えられ、宍戸城に前進する城館である可能性も考えられよう。(額賀)



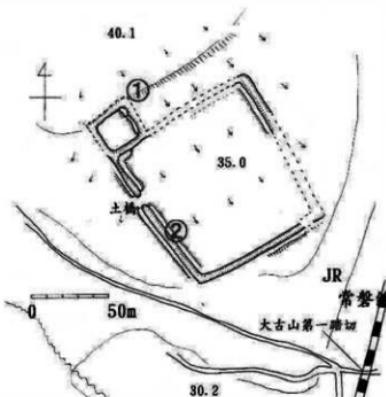
古館屋敷割図（『友部町史』より転載 原図は東北大学附属図書館蔵「秋田氏文書」）

まとうし やかたあと
0374 佐藤氏館跡 笠間市大古山 現況：山林 別称：佐渡屋敷

地図 42

佐藤氏館跡は、潤沼川左岸、金比羅山麓の小泉台地が東に延びる標高 37m の台地上に位置する。城跡は堀と土塁に囲繞されており、土塁は幅約 5m、高さ 1～3m の規模を有する。図中①の部分については、「友部町史」にも掲載されている部分ではあるが、現地には約 100m 四方の区画も残存している。「友部町史」段階からすると、現在は土塁の一部が崩れており、堀も埋まっている部分もあるというが、方形状の区画を認識することはできる。

築城年代については不明であり、佐藤氏（佐渡氏）の屋敷跡と伝えられているが、それ以外の歴史については不明であるとしかいいようがない。（額賀）



佐藤氏館跡縄張図 青木義一

すみよしじょうあと
0375 住吉城跡 笠間市住吉 現況：畠地、宅地 別称：住吉館

地図 42

住吉城跡は、潤沼川左岸の県道水戸岩間線より 40m 程西側に位置し、東西約 65m、南北約 30m の範囲に展開する。明確な遺構として見られるのは、近世の絵図にみえる「館ノ内」の部分であり、藪に覆われた方形区画である。周囲の栗畠より一段高くなっていることにより認識することができる。昭和 36 年の航空写真により、西側北西側の土塁がよく見られる。近世の絵図には、館ノ内の全面には「馬場先」のような城郭関連地名を拾い出すことができる。

築城年代・城主の伝承について不明ではあるが、街道脇を押さえる館として機能していたと考えられる。（額賀）



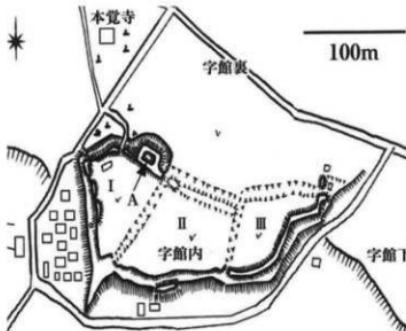
住吉城跡縄張図 五十嵐雄大 2022.5.22

ゆざきじょうあと
0376 湯崎城跡 笠間市湯崎 現況：山林、畠地 別称：湯崎住吉城

地図 42

湯崎城跡は、潤沼川左岸の標高28m程度の台地の縁辺部に位置し、東西約300m、南北約150mに展開する。遺構は、北西側の残存状況がよく、台地縁辺部沿いに土塁等が見られる。近世の湯崎村絵図によると、3つの曲輪に分かれていた様子が描かれ、現地地形を加味すると縄張図のように、I・II・IIIの曲輪配置が推測できる。

湯崎城は、室町前期の宍戸氏当主の宍戸朝里は、宍戸城の南東方面を守備するために築城したとされ、時期は貞和2年(1346)に教住寺(笠間市住吉)が開山されているので、その前後であると推測されている。文明13年(1481)小鶴原の戦いにおいて、大掾・小田・宍戸連合軍の拠点として使用されたとあるが詳細は不明である。(額賀)



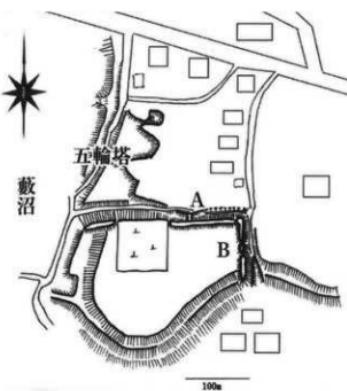
湯崎城跡縄張図 五十嵐雄大 2016.12.1 (『続茨』より転載)

ながとうじょうあと
0377 長兎路城跡 笠間市長兎路 現況：山林、墓地

地図 42

長兎路城跡は、湯崎城跡より東へ900mの潤沼川左岸の台地縁辺部に位置し、東西130m、南北110mの範囲に展開する。南側は崖、西側は谷があり込み、張り出し部分を区画することにより形成される。主郭のみの構造であり、北側東側をL型の土塁と堀が囲む。一部墓地により改変を受けているものの、残存状況は良好である。

具体的な築城年代・城主についての伝承はなく、戦略的出城として築かれたと推測される。同じ台地縁辺部に位置している湯崎城との関連もうかがえ、湯崎城が成立した時期と同時期か、近い時期に築城されたものと推測できる。(額賀)



長兎路城跡縄張図 五十嵐雄大 2016.12.2 (『続茨』より転載)

しもあごほりのうちやかたあと
0378 下安居堀之内館跡 笠間市安居 現況：山林、宅地 別称：安居堀ノ内館 地図 42

下安居堀之内館跡は、涸沼川右岸の標高 19m の微高地上に位置し、中心部は東西 100m、南北 80m の範囲に展開する。I は個人宅を方形に取り囲むように堀と土塁が存在し、北側西側が良好に残存する。I の南側には曲輪と思われる区画（II・III）、I の北側の広大な土地（IV）については、いずれも曲輪の一部として考えることもできるが、断定することは難しい。なお、IV には古墳 2 基が現存しており、前代の土地利用の様子もうかがうことができる。

築城年代、城主の伝承は不詳であるが、「常陸国富有人注文写」には「阿子郷」の領主として「龍崎弾正小弼」の名がみえ、富有人として「平内三郎」の名が見える。館南側の東西道と北側の涸沼川を押さえる拠点として機能していたことが推測できる。（額賀）



下安居堀之内館跡縹張図 五十嵐雄大 2016.9.15
(『続茨』より転載)

いづみよといちたてあと
0379 泉古市館跡 笠間市泉 現況：山林、宅地 別称：古市城

地図 42

泉古市館跡は、桜川支流の北岸 標高 37m の微高地に位置し、東西 100m、南北 70m の範囲に展開する。個人宅の周囲を囲むように堀と土塁が形成されていると考えられ、遺構としては北側部分に残されている。もっとも遺構を良好に残している北西部は、土塁の高さは 4m を越す規模を有す。また、北辺の土塁は直線ではなくわずかにクランク状に曲がっている部分がみられ、横矢掛りを意識した構造になっていると推測できる。

築城年代、城主の伝承は不詳であるが、相応の規模の防御施設を有していることから、臨時のなものではなく、本格的な軍事拠点として考えられる城郭である可能性もある。

（額賀）



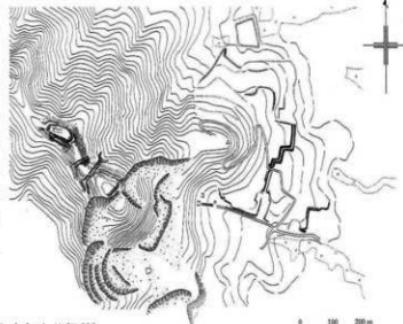
泉古市館跡縹張図 (藤井尚夫氏作図『岩間町史』より転載)

いざみじょうあと
0381 泉城跡 笠間市泉 現況：山林

地図 42

泉城跡は、笠間市の南部、標高 218m の鐘転山山頂上に立地する山城である。遺構は山頂部周辺と山裾部に展開する。山頂部に主郭を配し、北西に峰続きを 2 本の堀切で遮断し、さらに北西に楕円形の曲輪がある。この楕円形曲輪の最北西部には、コの字型の土塁と虎口がみられる。主郭の曲輪については、南東側を採石の影響により湮滅しているが、この部分にも曲輪は続いていたと考えられる。また、鐘転山東麓の緩斜面には、ジグザクに屈曲した空堀がみられ、防御施設の広がりを見る事ができる。完全な姿を見ることは叶わないが、相応な規模を有する城郭であったと推測できる。

明確な築城年代や城主については不明ではあるが、「筑波潤朝軍忠状写」の中に、嘉吉 2 年(1442)、宍戸持里の属城で宍戸莊内にある「泉城」を、長尾忠之が攻めたという記述がある。この記述から推測すると、室町中期の 15 世紀中頃には城郭として機能していたと考えられる。(額賀)

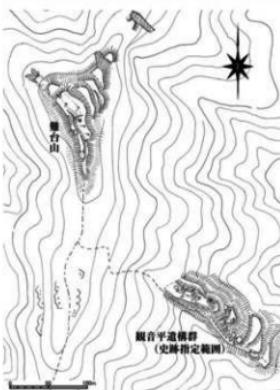


泉城跡縄張図（藤井尚夫氏作図『岩間町史』より転載）

なんだいきんじょうあと
0382 難台山城跡 笠間市上郷 現況：山林

地図 41

難台山城跡は、筑波山塊の難台山(標高 553m)に立地する。具体的に主郭と呼ばれる部分が見られるわけではなく、山頂部や「観音平」に遺構と思われるものが残存する。山頂より北東側に切岸状の平坦地や堀切が見られ、山頂から南東に 500m ほどの所にある「観音平」には、露岩した尾根状に曲輪らしき段が見られるが、わずかである。山頂部に見られる遺構は、戦国期のものであると推測されているが、後述する南北朝期の籠城戦における明確な遺構は不明である。小山義政の乱により落ち延びた小山若犬丸は、父義政の自害後に兵を挙げたが失敗し、小田孝朝を頼りかくまわれた。鎌倉府は嘉慶元年(1387)、これを討伐するために小田城(つくば市小田)を目指して進軍し、小田孝朝と五郎藤綱は難台山に籠城した。この難台山合戦に従軍した高麗清義の軍忠状には、「男体城切岸」「一城戸」という表記が見られ、難台山城の様子をうかがい知ることができる。(額賀)



難台山城跡縄張図 本間朋樹『改茨』より転載

たてぎしじょうあと
0383 館岸城跡 笠間市上郷 現況:山林

地図 41

館岸城跡は、館岸山山頂から南側の尾根や斜面に立地し、山頂から南北約500～600mの範囲に遺構が展開する。山頂部のわずかな平坦地(Ⅰ)、尾根をつたって南側に、山頂部より少し広い平坦地(Ⅱ)が見られ、さらにも南側には、周囲を土塁や帶曲輪状の遺構で囲まれた空間(Ⅲ)が存在し、周囲にも遺構らしきものが見られる。ⅠやⅡの北側には、尾根を遮断するような堀切があり、Ⅲは谷を取り込むような形で防御線が囲まれており、その一部が池状の水溜りになっている。築城時期や城主については不詳であるが、伝承によると嘉慶元年(1387)、難台山合戦において鎌倉府軍が陣を張った所とされ、「高麗清義着到軍忠状」にみられる「朝日山」は館岸山の事を指すという見解がある。しかし、現在見られる遺構は、戦国時代末期に一定の計画に基づき、短期間に造られたものと推測されている。(額賀)

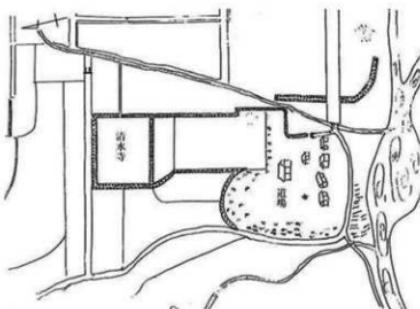


やまとおたてあと
0385 山尾館跡 笠間市平町 現況:畑地、宅地

地図 35

山尾館跡は、宍戸氏が当初構えた館として『友部町史』で紹介されている。延応元年(1239)、涸沼川をのぞむ丘陵地である現在の清水寺付近に館を構築し、南の一角に持仏堂(新善光寺)を建立した。四方を堀と土塁で囲んだ方形単郭であったと考えられる。南北朝期から室町期になると、本城を囲む防衛策として山尾館を改修して西城と称した。現在は清水寺の境内となっていて、当時の姿を見ることはできないが、見取図にある清水寺から南にのびる高まり部分は現在も確認することはできる。

宍戸氏の中世拠点の候補地として考えることもできるが、定かではない。宍戸氏の系図には天正末期、宍戸義長の弟義顕が在城と伝わる。また、江戸時代に八田知家と宍戸家政を供養した五輪石塔(笠間市指定文化財)は、この地の一角の墓地に見られる。(額賀)



山尾館跡見取図(『友部町史』より転載)

すみよしひのうち
0386 住吉堀ノ内 笠間市住吉 現況：山林、宅地

地図 42

住吉堀ノ内は、住吉城跡より東に 300m 離れた笠間市立北川根小学校の北側部分に位置する。近世の絵図によると、北川根小前面の道路を挟んで、方形の区画が 2 つ見られ、「堀ノ内」の地名を有していた。遺構は北川根小学校北側の区画についてはすでに失われており、現在は太陽光発電施設となっている。道向かいの部分については、一部土塁が残っており、その痕跡を見ることができる。さらに周囲にも城郭痕跡と思われる溝らしき痕跡も確認することができる。

築城年代、城主については不明ではあるが、位置関係からして住吉城跡との関連がうかがえ、同時代に機能していたものと推測できる。

(額賀)

住吉堀ノ内縄張図 五十嵐雄大 2022.5.22



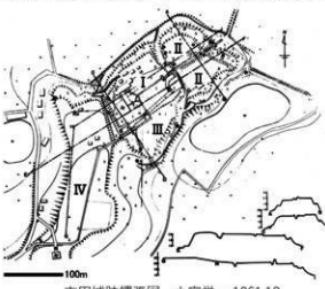
よしだじょうあと
0390 吉田城跡 水戸市元吉田町 現況：山林、畠地、宅地、寺院境内地

地図 36

吉田城は、東茨城台地の標高約 20m の北縁に位置する。北側は那珂川が開削した沖積低地が広がり、比高差は約 13m である。城の北方は低湿地帯、東方は常照寺池があり天然の堀となっている。城の占地で重要な点は西方の谷地である。この谷は水戸城下から古宿方面へ向かう古道の可能性が高く、古道の両側に吉田城と大锯町遺跡（0419）が立地する。まさに要衝の地といえる。

規模は南北約 450m、東西約 170m を測る。曲輪は I ~ IV 郭の 4 区画に大別される。I 郭（現常照寺境内）が主郭で、北側に II 郭（参道により分割されている）、南側に III 郭、東側に IV 郭がそれぞれ設けられている。I 郭を廻る南北の土塁と堀が良好に残っている。I・II・IV 郭の外周には帶曲輪が開繞する。大手は不明だが、II 郭のある北方という説が有力である。

『新編常陸国誌』によれば、吉田城は中世初頭に常陸平氏一族の吉田太郎盛幹が築城し、代々吉田氏が居城としたという。その後の記録はなく明らかではないが、戦国期の縄張の特色を有していることから、江戸氏が水戸城を奪還して以後は水戸城の支城として機能し、天正 18 年（1590）の佐竹氏による領国統一によって廢城となったと思われる。発掘調査例が極めて少ないため、具体的な年代は定かではない。一説には、佐竹氏家臣の車丹波の居城とされるが、根拠はない。（関口）



吉田城跡縄張図 小室栄一 1961.12
(小室 1965『中世城郭の研究』より転載)

0389 長者山城跡 水戸市渡里町 現況：山林、畠地、太陽光発電所ほか

別称：渡里の長者屋敷、一盛長者伝説地

地図 36

長者山城は、標高約 31m の東茨城台地北縁上に位置する。台地北辺は田野川に、東辺は那珂川に開析される。沖積低地との比高差は約 27m である。この地は東山道が那珂川を渡河する要衝であり、対岸には佐竹氏の田谷白石台城（0403 白石遺跡）が位置する。

主要曲輪の規模は南北約 370m、東西約 440m を測り、西側は国史跡台渡里官衙遺跡群の一部となっている。同史跡の発掘調査により中世遺構が検出され、城の主要曲輪の範囲外に土塁が残存していること等から、長者山城は外郭や宿等を含めると、更に広範囲に展開するのは疑いない。

曲輪は I～V 郭の 5 つに大別される。I 郭は南北約 100m、東西約 80m を測る。南・東・西の周囲に二重の土塁が廻り、土塁間は堀となっている。繩張は单郭の城館としても通用し、I 郭のみの城館から、後に II 郭以下が追加されたという変遷も想定可能だが、立証は今後の課題である。

II 郭は I 郭の南側に展開する。規模は南北約 110m、東西約 140m の方形で北東側に約 30m 四方の張出が付く。西側はかつて二重土塁があった（『水戸市史 上巻』）。南側にある III 郭との境には堀があった。この堀は発掘調査で確認され（1 号堀）、上幅 7.2m、深さ 4.6m の U 字状の堀であり、北・南側には土塁が付設していたことが判明している（水戸市教育委員会 2020）。

III 郭は現況から東西約 200m、南北約 100m の方形を呈していたとみられる。発掘調査では 16 世紀後半の 2 号堀と 16 世紀末の 3 号堀が検出されている。

IV 郭は I 郭西隣にある方形の曲輪だが遺構は明瞭ではない。現況で南北約 50m、東西約 40m を測り、北・東・西方に土塁が廻る。

V 郭は IV 郭西隣にある。南北約 50m、東西約 50m で、南東角に張出が付く。東西に土塁が、南に堀が廻り、西土塁は二重となる。V 郭は最古式の繩張で、古代末～中世初期の遺構とされるが（『水戸市史 上巻』）、発掘等で立証されていない。

更に城が立地する台地斜面東側に堀が走るほか、堅堀と思われる遺構もある。

長者山城の語源は、八幡太郎義家の長者伝説による。一盛長者と呼ばれる長者が住んでいたという伝承が現在も残る。「水府志

料」では源頼信 5 男の常葉五郎

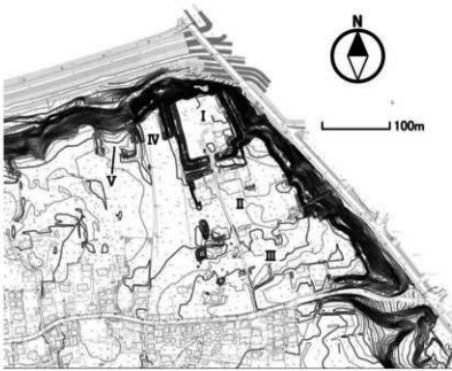
義政に比定している。また、天正

年間には江戸氏臣家の春秋駿河

守が城主であったとの記述もある。

いずれも検証の余地があるものの、この地が江戸氏の領域であったことは疑いなく、春秋氏一族が城主となったという解釈は支持できる。

城の終焉については、発掘調査で近世に廃城されているのが明らかであり、天正 18 年（1590）の江戸氏滅亡に伴い、廃城になったものと考えられる。（関口）



かわわだじょうあと
0391 河和田城跡 水戸市河和田町 現況：山林、水田、畑地、宅地、公共施設地 地図 36

河和田城は、東茨城台地の中央部を流れる桜川が開析する標高約 30m の湿地帯と微高地内に曲輪が展開する。

河和田城の範囲は東西約 900m、南北約 900m と広大である。天徳寺・報仏寺・八坂神社・河和田小学校が所在する東西約 510m、南北約 600m の範囲には土塁・堀等の遺構がよく残っている。

曲輪は、I～VII郭（西郭と呼称）と VIII～X 郭（東郭と呼称）に大別される。東西郭の間には南北に用水が流れ、両脇に湿地帯（水田）が広がる。すなわち、河和田城は曲輪の中央を縱断する幅約 30m の湿地帯の両側に、東郭と西郭が展開する特異な形態を呈する。

I郭の防禦施設は手厚く、西側は 4～5 重土塁（推定）と 4 重の堀、北側は 3 重土塁と 2 重の堀、西側は 2 重土塁と堀 1 条が囲む。

II郭は、湿地帯とほぼ同レベルで舟入の機能が想定される。III・V郭は両郭をつなぐ土塁・堀が発掘調査で検出され（松浦・新垣 2019）、同一曲輪として捉えたほうが良いかもしれない。IV・VI・VII郭は、いずれも小さな曲輪である。IV郭と VII郭の境（八坂神社付近）の土塁は耕形虎口を呈し、大手であった可能性が高い。南側では宿に関連する遺構と遺物が検出されている（水戸市教育委員会 2016）。VII郭は、内部南寄りに二重土塁があり、南北 2 つの曲輪に分かれる可能性がある。南側では、墓域が検出されている。IX郭は、報仏寺境内に位置する。西側の湿地帯を背に南・北・東の三方に土塁が取り囲む。X郭は、遺存状態が悪く不明瞭な点が多い。

河和田城は、建武 4 年（1337）、大掾氏家臣の鍛治彈正貞国（川和田入道）が築いたとされる。元中 4 年（1387）、難台山城の戦いの軍功により河和田城は佐竹氏配下の江戸通景が城主となる。応永 33 年（1426）、通景の子通房が水戸城主となり、河和田城は江戸氏の重臣である春秋尾張守幹治が城主となった。しかし、天文 18 年（1590）佐竹義宣による水戸城攻めにより江戸氏は没落し、翌日の 12 月 20 日に水戸城の支城を攻撃、この際河和田城も落城したとされる。

さて河和田城は三～五重の土塁や堀といった防禦施設が注目されがちだが、第一の特徴は手厚い防禦施設を備えながら、東の水戸城（0396）と西の中妻三十三郷（江戸氏の穀倉地帯）を結ぶ物資の中継・集積拠点としての機能を有した水城という点にある（関口 2007）。城郭北側の桜川沿いには土塁が複数残存し、桜川から II郭にかけて舟入遺構があり、城内に進入できた可能性がある。

さらに城の周辺には桜川西遺跡・経塚遺跡・坪遺跡・赤塚遺跡等の中世の遺跡が分布し、活発なヒト・モノの往来があったことが発掘調査によって確認されている。また、外城・東組・南組等の地名も残る。このように河和田城は、主郭はもとより周辺の関連遺跡についても考古資料の蓄積が目覚ましく、城とそれに付帯する宿や村の実態を解明できる重要な城館遺跡である。（関口）



河和田城跡攝張図（水戸市教育委員会 2019 を加筆）

たけくまじょうあと
0392 武熊城跡 水戸市東台 現況：宅地、公共施設地 別称：武熊館、武熊故城 地図 36

武熊城は、桜川右岸の標高約7mの沖積低地に位置する。往時は台地が存在し、台地全体が城館であった。慶安4年（1651）、千波沼新道（柳堤）築堤の土に利用するため削平され、現在は平地となり遺構は存在しない。しかし東台という地名が往時ここに城館があったことを示している。

『新編常陸国誌』によれば規模は南北4町余（約440m）、東西5町余（約550m）で、南側（横竹限町）が大手、北側（十間町）が搦手であったという。現在でも搦手橋などの地名が残っている。右図は『国誌』、近世の町割。旧桜川の流路等をもとに推定した城域である。水戸城本丸・二の丸に匹敵する平面規模（4町×5町）であり、水戸城（0396）直近の東の出城として重要な位置を占めていたことは間違いない。

武熊城は中世初頭、水戸城主・大掾資幹の弟の石川望幹が築城したとされる。応永13年（1406）、江戸通房が水戸に進出したのに伴い、城は江戸氏の属城となり、通房の弟通重が入って武熊氏を名乗った。永禄元年（1558）に佐竹義宣が水戸城を居城にして以後は、重臣・東義久の居城となったという。（関口）



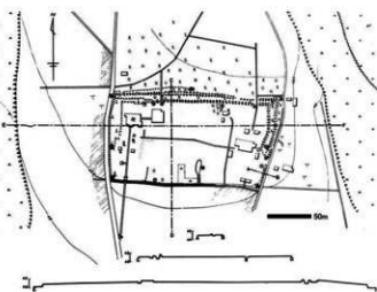
かくらいやかたあと
0393 加倉井館跡 水戸市加倉井町 現況：山林、畠地、宅地、寺院境内地 地図 36

加倉井館は、鶴足山塊南側の標高約42mの丘陵地上に位置する。館周辺の丘陵地は桜川の本支流に開析された谷があり込んだ鋸歯状の高台地形となっており、加倉井館もこうした高台の一つに占地し、谷地との比高差は10～15mを測る。現在は妙徳寺の寺域となっている。

規模は東西約220m、南北約110mの長方形を呈する。城域の北側と東側に二重の土塁と堀が残る。西側・北側は近世期の土地利用によって土塁・堀が削平されたが、堀1条の底部が残存しているため城域の四至は明確である。本来は二重土塁と堀が館を囲繞していた単郭の方形館であった。

加倉井館は加倉井氏の居城であった。13世紀末、甲斐に出自を持つ波木井実氏が館を築いたとされる。4代後の通久の代に加倉井氏を名乗り、江戸氏重臣となった。館は天正18年（1590）の佐竹氏による水戸進出により廃城となり加倉井氏は帰農した。館跡には、加倉井氏が代々帰依した妙徳寺が移転し現在に至っている。

（関口）



加倉井館跡縹張図 小室栄一 1962.11
(小室 1965『中世城郭の研究』より転載)

かのうやかたあと
0394 神生館跡 水戸市飯富町 現況：山林、畠地、宅地

別称：大部城、神生遠江守館、神生長堅

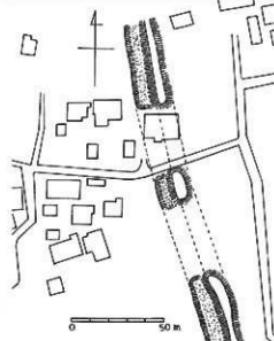
神生館は、鶴足山塊から伸びる標高約39mの丘陵地縁に位置する。北側には藤井川が開析した沖積低地が広がり、比高差は約20mを測る。

遺構は、南北方向に延びる土塁が3か所認められ、土塁西側に堀が付く。土塁延長は約180mを測る。本土塁が館に伴うものか、館附属の長堅であるのかは不明である。

『新編常陸国誌』に「此邊二住セヨシナレバ、其館アトナルベシト思ハル」とする程度で遺構の記述はない。

神生館は、天正16(1588)年に勃発した神生の乱の舞台となった。12月5日に江戸通澄が、江戸氏臣の神生右衛門大夫の居城を攻撃したが、この居城が神生館とされる。右衛門太夫は、館を逃れ佐竹氏麾下の小野崎氏を頼ったことから、内乱はやがて小野崎・江戸・佐竹・伊達を巻き込む争乱に発展していった。このように神生館は戦国期における江戸氏内乱の舞台となった著名な城館であるが、不明な点が多く今後の調査が待たれる。(閑口)

地図 30



神生館跡縄張図 青木義一 2007.4 (『続茨』より転載)

みがわじょうあと
0397 見川城跡 水戸市見川 現況：山林、畠地、寺社境内地 別称：春秋氏館 地図 36

見川城は、桜川が開析する東茨城谷地（桜川緑地）の左岸、標高約25～28mの台地縁に位置する。南側にも桜川支流の小支谷が入り込み、東・南側は谷地斜面とする占地である。桜川緑地との比高差は約17～20mである。

規模は南北約180m、東西約210mを測る。曲輪はI～IIIの3郭に大別される。I郭が主郭で、規模は南北約100m、東西約80mを測る。周囲を土塁が囲繞し、谷地である東・南側は二重土塁となる。I郭南西側には土塁で囲まれた約30m四方の張出が付設している。I郭西側にはII・III郭が南北方向に並び、各曲輪の西側は土塁・堀が断続的に残存している。西股總生は『中世城郭研究』第22号において、さらに詳細な縄張図を提示し、見川城を防禦に特化した戦国末期の戦術的築城であると評価している（西股2008）。

『新編常陸国誌』では、見川城は江戸氏臣の春秋石見守幹光の居城に比定されている。幹光は河和田城主春秋尾張守幹安の2子であるという。14世紀末～天正18(1590)年までこの地は江戸氏の支配領域であり、重臣である春秋氏一族が配されたことは当時の政治情勢と整合する。(閑口)



見川城跡縄張図 青木義一 (『茨改』より転載・加筆)

みとじょうあと
0396 水戸城跡 水戸市三の丸 現況：宅地、学校、公共施設地

別称：馬場城、馬場館

地図 36

水戸城は、東茨城台地の北側、那珂川と桜川に挟まれた標高約25m～33mの馬の背状の台地（通称上市台地）先端部に位置する。北・南・東側は那珂川やその支流が開析した沖積低地が広がる。すなわち、水戸城は北・南・東の三方を水に囲まれた好適地であるとともに、水上交通の要地であった。また、陸路としても太田・府中・沼沢方面の各街道を結ぶ要衝であった。こうした立地から、水戸城は中世初頭より、地域の霸権を目論む豪族・大名の居城として利用された。

主郭部分は、上市台地の地形を利用し3箇所に堀切を設け、4つの曲輪（東から下の丸、本丸、二の丸、三の丸）を構築している。各曲輪の間に土塁と堀を設けた。本丸西側土塁と堀（水郡線路）は堀幅約40m、比高差約22m、二の丸西側土塁と堀（県道232号線）は堀幅約40m、比高差約12m、三の丸西側土塁と堀は堀幅約30m、比高差約14mを測る。

水戸城は、主郭部分だけでも東西約1,200m、南北約400mを測り、土造りの平山城としては国内最大級の規模を有する。さらに、水戸城は惣構を有しており、規模は東西約3.5km、南北最大約1.2kmを測る。惣構は、寛永年間の城下町普請に伴い構築されたと考えられる。

水戸城は、12世紀末～13世紀初頭に常陸平氏一族の馬場資幹が、本丸に館を構えたのが最初とされる。資幹は、建久4年（1193）、曾我兄弟の仇討ち事件を契機に常陸大掾職を継承し（「吾妻鏡」）、常陸平氏の惣領となって府中城（0581）と水戸城に根拠を置いた。以後、水戸城は馬場大掾氏の居城として約2世紀にわたって地域支配の中心地となった。

元中4年（1387）、難台山城（0382）の戦いで軍功を挙げた下江戸郷の土豪・江戸通高は大掾氏の領域内に所領を与えられ、江戸氏は水戸地域に進出することとなる。これに対し応永7年（1400）、大掾満幹は水戸城の修築を行い、水戸地方の防備を固めている。応永33年（1426）、江戸通房は大掾満幹の留守を狙って水戸城に奇襲をかけ、これを奪取した。この水戸城奪取事件を契機に大掾氏は水戸の支配権を失い、代わって江戸氏が水戸城を居城とし、以後7代160年にわたり勢



水戸城跡復元図（都市計画図との重ね図） 小野寺敦・茨城大学図書館（一部加筆）

力を拡大していくのである。

江戸氏時代の水戸城は二の丸まで整備され、本丸部分を内城、二の丸部分を宿城（天王曲輪）と呼んだ。内城は江戸氏の居城として、宿城は一族重臣の屋敷地および市が設けられたという。

江戸氏は時に主家である佐竹氏と水戸地域の領有をめぐって争い、また常陸南部にも進出して大掾氏や小田氏を脅かすまでになったが、天正18年（1590）、小田原合戦への参陣を怠ったことにより、江戸氏の立場は急変する。同年、佐竹義宣は豊臣秀吉から常陸北部を安堵され、領国統一に乗り出るのである。義宣は江戸重臣に水戸城譲渡を要求するが、重通はこれを拒否した。同年12月19日、義宣は太田城を出発し三方から水戸城を急襲した。佐竹勢は火を放ちながら郭内に攻め入り、江戸勢は奮戦の末敗退、重通は結城に落ちのびた。160年の長きにわたって水戸城を治めた江戸氏は一夜にして没落し、変わって佐竹氏が水戸城を支配することとなったのである。

天正19年（1591）3月、義宣は居城を太田城（0137）から水戸城に移し、文禄2年（1593）に水戸城および城下の大規模な普請を行った。江戸氏時代の内城を修築して本丸（古実城）とし、宿城の一角に自身の居館を構え二の丸とした。さらによ下の丸（淨光寺曲輪）・三の丸はほか城下も整備し、家臣団を集住させるとともに、町人地を設けた。この普請により、水戸城は近世城郭としての整備がなされたと言われている。現在の本丸内には薬医門（県指定建造物）がある。もとは本丸虎口に設置されており、中世水戸城で唯一現存する建造物である。

関ヶ原の賞罰が一段落した後の慶長7年（1602）、義宣は徳川家康より突如秋田に国替を命ぜられる。その後直ちに家康による検知・国割が実施され、水戸には家康5男で甲斐武田氏の名跡を継いだ信吉が15万石で封ぜられた。しかし信吉は翌年に急死し、嗣子がいなかったため、家康は19男の長福丸（後の徳川頼宣）を領主とし20万石を与えた。慶長14年（1609）、頼宣は駿河・遠江・東三河50万石に転封となり、代わって家康11男の頼房が下妻城より25万石で入城した。この徳川頼房を初代として、御三家水戸徳川藩は11代にわたって水戸を領し、明治に至る。

水戸徳川家による城郭整備は寛永2～15年（1625-38）にかけて行われた。城内には二の丸に屋形（御殿）や三階櫓（天守）が構えられた。その後元禄11年（1698）には2代光圀により二の丸に水戸彰考館が、天保12年（1841）には9代齐昭により三の丸に藩校弘道館が開設された。

このように現在の水戸城は、馬場大掾氏・江戸氏・佐竹氏・徳川氏の盛衰の中で随時整備・拡張されてきたものであるが、各遺構の構築年代、とりわけ本丸・下の丸の土地利用の実態については不明な点も多く、考古資料の蓄積による今後の進展が望まれる。（関口）



水戸城惣構 関口慶久 下図は常陸国水戸城絵図（国立公文書館内閣文庫蔵）

かくらいただみつやかたあと
0401 加倉井忠光館跡 水戸市成沢町 現況：山林、宅地

地図 30

加倉井忠光館は、鶴足山塊から伸びる標高約 40m の丘陵地上の平坦地に位置する。

規模は南北約 170m 、東西約 210m を測り、平面は台形状を呈する。土塁西側には枠形虎口が現存する。県道 51 号線に接する南側土塁は 2006 年以前まで現存していたが、道路改良工事で失われた。現在、県道に沿って土塁状の高まりがあるが、これは城館とは無関係である。

道路改良工事に伴う発掘調査では、高さ 1.2m の土塁と深さ 1.2m の堀が検出されている。南側土塁・堀は直線ではなく、東側でクランクするのが特徴である。構築年代は近世だが、一部で中世の構築とみられる場も検出されている（茨城県教育財団 2008）。

加倉井忠光館は享禄 3 年（1530）、加倉井氏本家第 12 代重久の弟・忠光が、主家の江戸忠通より成沢の地を賜り構えたという。以後、成沢加倉井氏は代々この地を統治した。近世以後も帰農して館に住み、成沢庄村屋として村を治めた。館は中世城館から近世有力百姓の屋敷へ移行したものであり、現状視認できる遺構の大半は近世の所産と見てよい。（関口）



加倉井忠光館跡の範囲 関口慶久

おおぶへいたろうやしきあと
0402 大部平太郎屋敷跡 水戸市成沢町へ飯富町

現況：山林、畑地、宅地ほか 別称：飯富長塁 地図 30

大部平太郎屋敷は、鶴足山塊から伸びる標高約 37m の丘陵上に位置する。城館の南方は東の藤井川・西の田野川に開削された舌状の支丘地形になっており、城館は支丘の根本付近に東西方向に展開している。

城館名は大部平太郎屋敷と呼ばれているが、遺構としての実態は延長約 600m に及ぶ長塁である。舌状支丘と丘陵地を区切る外郭遺構と見られる。支丘先端に城館本体が構えられていた可能性がある。『続茨』では、航空写真から神生館（0394）と接続していたと想定しているが、軸線としての延長は認められるものの土塁は認められない。長塁の機能を含め検証の余地があろう。

大部の地は、天文 17 年（1548）の大部平の戦いや天正 16 年（1588）の神生の乱の舞台となっており、長塁周辺は江戸氏勢力下であったことは疑いない。恐らくは神生氏の属城に関連する遺構と考えられる。支丘先端に鎮座する式内社大井神社との関連も含め注視すべき長塁遺構である。

なお、城館名になっている大部平太郎は、唯円の兄である北条平太郎房維のことであるが、城館との直接の関連性は見出せない。

（関口）



大部平太郎屋敷跡縄張図 青木義一 2007.4 〔続茨〕より転載

しらいじいせき
0403 白石遺跡 水戸市田谷町 現況：山林、畠地、浄水場 別称：田谷白石台城 地図30

白石遺跡は、那珂台地の標高約33mの南縁に位置する。北側は、那珂川が開削した沖積低地が広がり、低地との比高差は20~25mに達する。

本遺跡は、1990~91年にかけて県中央水道事務所（水戸浄水場）建設に伴う発掘調査が実施され、城館のはば全面が調査された（茨城県教育財団1993）。報告書によれば城館は、I~IV期の4期の変遷を辿る。I期（13世紀~14世紀前葉）の規模は南北推定80m、東西推定77mで、深さ20cmの浅い堀（10号堀）で区画される。推定平面形は、北西隅を欠いた方形である。郭内には、掘立柱建物1棟と墓坑群が検出されている。

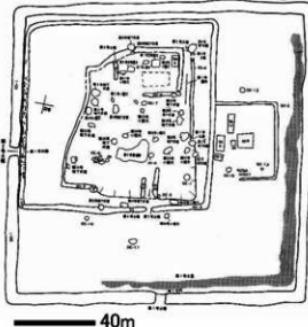
II期（14世紀中葉~15世紀前半）の規模は南北推定80m、東西65m。深さ約1mの堀（5号堀）が囲繞し、平面形は歪んだ台形である。検出遺構は地下式坑・墓坑群・井戸等で建物はない。

III期（15世紀中葉~後葉）の規模は、1辺103mの正方形を呈し、東側に南北約40m、東西約30mの方形の副郭を設ける。主郭を囲む堀（3号堀）は、上幅4m、深さ130cmである。主郭内に建物遺構はなく、方形窓穴や地下式坑が検出されている。一方、副郭には5棟の掘立柱建物が並び、土地利用に偏差が認められる。I期~III期の虎口は南堀のやや東寄りに開口している。

IV期（15世紀後葉~16世紀前半）の規模は、1辺165mと大きく範囲を広げ、上幅7m、深さ3mの箱堀（1号堀）が四辺を取り囲む。堀の内側には高さ1.1mの土塁が確認されている。5・3号堀はIV期段階でも埋め戻されずに機能していたと報告されている。遺構は5号堀内とIII期の副郭内に集中し、それ以外は広大な空閑地となっている。遺構の大半は地下式坑や墓坑群・井戸で、副郭内に4棟の掘立柱建物があるものの居館跡は検出されていない。報告書では、5号堀内区画の北棟隅に居館跡を推定している。

白石遺跡は、県央地区において中世居館のほぼ全城を調査した数少ない事例である。報告書ではI・II期は「農地開発經營を目的とした初期館跡」で、III・IV期になると「戦闘を目的とした館城」に移行していくとまとめられており、その明快なストーリーは、様々な城館研究の中で引用・参照されてきた。一方、主郭内に建物がほとんどないこと、I~IV期変遷の決め手となっている堀内から出土した遺物で、年代決定の定点となる遺物が少ないとなど、課題も残されている。白石遺跡は、中世城館の古典的成果であるとともに、再評価が必要な城館である。

白石遺跡は、佐竹氏臣の白石氏の居館と伝わる（『水戸市史 上巻』）。また、古代河内駅家（田谷庵寺に比定）に近く東海道に沿って立地している。こうした古代以来の要衝を引き継ぎながら館が構えられたのであろう。15世紀の那珂川対岸は江戸氏の支配域で、長者山城（0389）が存在する。江戸氏は、白石氏と同じ佐竹氏麾下であるものの、度々主家に反抗していた。両城の間に相応の軍事的緊張があり、境目の城としての性格を帯びた時期があったものと見られる。（関口）



白石遺跡IV期平面図(茨城県教育財団1993より転載)

なかがちやかたあと
0404 中河内館跡 水戸市中河内町 現況：宅地 別称：宍戸館

地図 36

那珂川左岸の標高 9 m の微高地上に位置する。旧国道 118 号線と那珂川の渡河点を指向している。

民家敷地に遺構が点在している。A は、高さ 3 m の折れを伴う土塁と南北に幅 2 m の堀跡が断続的に 50m にわたって残っている。B は、東西に高さ 2 m の切岸が 20m 残っている。本来ここには土塁と堀があつたようで、曲輪が二つ以上あったと考えられる。C は道路がクランク状になっていて、大手道と推定される。館の南には字前田という領主の直営田を思わす地名が残っている。

伝承では、宍戸安芸守の館跡と伝えられている。(五十嵐)



中河内館跡縫張図
五十嵐雄大 2021.6.10 協力者：菊池壮一

いづやしきあと
0405 伊豆屋敷跡 水戸市栗崎町 現況：畠地、墓地

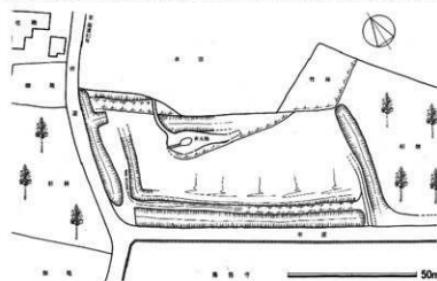
地図 37

伊豆屋敷は、東茨城台地と那珂川が開析する沖積低地の境界辺に位置し、台地が低地に向次第に高度を下げる標高約 9 m の斜面に位置する。

1997 年、墓地造成に伴う発掘調査が行われた（水戸地方埋蔵文化財調査研究会 1998）。水戸市内において城館の主体部を比較的広範囲で調査した数少ない事例である。

調査によって図示されている館の規模は南北 37m、東西約 100m の長方形を呈し、高さ 0.6~2.5m の土塁が周囲を取り囲んでいた。当時は調査区外にも土塁があったようで、調査区は曲輪の一部に過ぎないと記載されている。館の規模を南北 89m、東西 47.5m とする表も添付され整合性に疑問があるが、現況から往時を復元することは難しい。年代決定となる遺物も出土していない。

『新編常陸国誌』には、伊豆屋敷は江戸氏家の立原伊豆守の居館で、近世期には修驗者二階堂氏の宅地と記されており、中~近世にかけて土地利用があったことは疑いない。そのため、調査された土塁が立原氏時代に遡るかどうかは一定の留意が必要であろう。（関口）



伊豆屋敷跡遺構全体図（水戸地方埋蔵文化財調査研究会 1998）

おおくしはらやかたあと
0406 大串原館跡 水戸市大串町 現況：山林、畠地

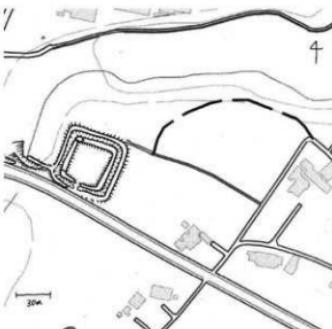
地図 37

那珂台地の西端と那珂川に注ぐ支流の谷津に挟まれた標高 17m の台地先端部にある。谷津の反対側には、椿山館があったが現在工場敷地のため、煙滅している。

高さ最大 1 m の二重の土塁と幅 3 m の堀が一周している。曲輪の広さは 900 m² 程で小さな居館である。南側が開口していて、ここが大手道と考えられる。また、西側の谷津から上がる堀底道がある。

「石川家旧記」によれば、鎌倉時代に石川家幹の末子の字男が大串を名乗り本拠にしたといわれている。また、「常澄村史」によれば 14 世紀にあった光明寺の跡とされるが定かではない。

館の東 500m には、素齋神社があり、ここにも堀跡が残っていて、何かの関わりがあったと考えられる。(五十嵐)



大串原館跡縄張図 五十嵐雄大 2022.8.12

くぼやまやかたあと
0407 久保山館跡 水戸市森戸町 現況：山林、寺社境内地

地図 44

那珂台地と涸沼川に注ぐ石川川とその支流の沢によって削られた標高 28m の台地先端部にあり、曲輪中央に鹿島神社が鎮座している。

北側から登城路と思われる A があり、そのまま東側に向かうと深さ 1m の横堀になり南側の B まで回っている。B の所で、神社参道になって遺構が不明瞭になる。恐らく a で旧参道に接続していたとみられる。曲輪としては、南北 60m 東西 40m の単曲輪とみられるが、北側や西側にも残っている可能性がある。また、土塁状に見える a や堀状に見える b は、繩張と合致していないため、参道の開削の土盛りと考える。

城主、築城年代等は不詳。すぐ東に森戸館があり、その詰城か物見台と考える。(五十嵐)



久保山館跡縄張図 五十嵐雄大 2021.6.10
協力者：菊池社一

こいぶちじょうあと
0409 鯉淵城跡 水戸市鯉淵町 現況：山林、畠地、宅地、寺社境内地

地図 35

鯉淵城は、東茨城台地の中央部を流れる涸沼前川と古矢川の合流地点にある標高約31mの台地突端上に位置する。北は古矢川、南は涸沼前川が開析する谷で、比高差は約5mである。

鯉淵城のある地名は根古屋といい、ここに内城と呼ばれる城館遺構がある（図中A）。狭義の鯉淵城は内城のみであるが、その北西に堀ノ内館（図中B、曲輪内には国重要文化財鯉淵家住宅が存在する。）があり、内城と堀ノ内館を包括して広義の鯉淵城とする見方もある。右図は広義の鯉淵城の縄張図であり、これに基づけば南北約700m、東西約350mの市内屈指の広大な範囲の城郭遺構となる。鯉淵集落全体を取り込み、惣構とも認識できる規模で注視される。

『内原町史 通史編』によれば、鯉淵城は江戸氏一族の通重が鯉淵氏を名乗り、代々の居城としたという。また、5代通賢の時に内城と堀ノ内館を合体させ、佐竹氏の砦としたとする。江戸氏の支城が佐竹氏の城として転用されたという説は典拠がなく検証の必要があるが、鯉淵城は中妻三十三郷の南側、涸沼川水系の入口を抑える要衝にあり、江戸氏の拠点的な城館の一つであったことは間違いない。（関口）



おおだらじょうあと
0411 大足城跡 水戸市大足町 現況：畠地、寺社境内地

地図 35

旧国道50号線から400m北へ行った標高40mの平城である。

主曲輪は、民家の墓地に土壇と堀跡が見られそれ以外は耕地改变で埋滅している。航空写真では300m四方の方形区画が二つ確認できる。北側の安国寺境内には幅4mの堀跡と高さ最大2mの土塁の曲輪が二つ確認できる。さらに2020年のバイパス工事に伴う発掘調査で外郭堀と思われる幅5mの箱築研堀が確認され、城の範囲は、南北800m、東西400mの規模と考えられる。

外岡伯耆守の館といわれている。城の南東に二所神社（稲荷神社と鹿島神社明治時代に合祀）が鎮座している。このうち、稲荷神社には永禄9年（1567）11月の建立棟札に大檀那當城主外岡伯耆守平朝臣廣重号道栄入道（「常陸道文」1）とあり、大足城主外岡氏の活動がみられる。外岡氏は江戸氏の有力被官であった。中でも廣重は「中妻三十三郷の大将」とあり、大足村を中心として一定規模の領域を治めていたと思われる。（五十嵐）



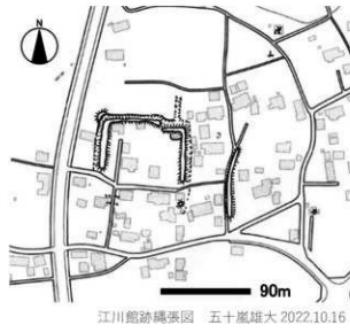
えがわやかたあと
0414 江川館跡 水戸市内原町 現況：畠地、宅地 別称：荏原城、荏柄城

地図 35

江川館は、調沼前川支流の古矢川右岸の標高約35mの微高地に位置する。北側と東側は古矢川が開析した湿地帯に接し、比高差は3mを測る。南側も小支谷が入り込み水田が広がっている。

館の規模は100m四方の正方形を呈する。東・西・北側に高さ約1mの土塁が残り、外側に幅約3mの堀が廻る。北側土塁の中央部には食達状の虎口がある。南側にも堀がわずかに残り、館の規模を復元することができる。また、館の東方約160mの地にも、江川館の外郭土塁とみられる南北方向に延びる土塁が1条残存している。

江川館は那珂氏を出自に持つ佐竹氏家臣の内原氏の居館とされる（『内原町史 通史編』）が、『新編常陸国誌』では内原氏は江戸氏家臣で鯉淵村に居住していたとされ、江川館主が内原氏である根拠が明らかではない。この地は中妻三十三郷の領域であることから、数ある江戸氏城砦の一つとみたほうが自然であろう。（関口）



江川館跡構造図 五十嵐雄大 2022.10.16

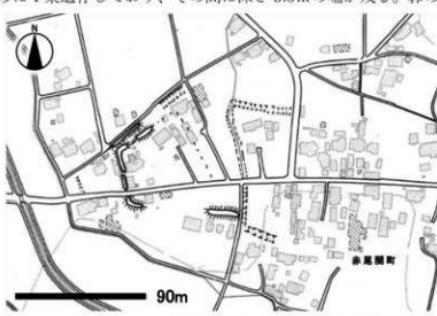
あこうぜきやかたあと
0415 赤尾閑館跡 水戸市赤尾閑町 現況：畠地、宅地 別称：赤尾閑城

地図 35

赤尾閑館は、東茨城台地の中央部で、北は桜川・南は古矢川に開析された湿地帯から2mほど高まった標高約35mの微高地に位置する。

遺構が断続的に遺存するため正確な規模は不明だが、現状で南北約140m、東西約100mを呈し、東から西に向かって南北長がすばまる台形状を呈する。城館西側及び北側で土塁・堀が比較的良好に残っており、本来は郭の周囲を土塁が囲繞していたことは間違いない。土塁の高さは最大2.4mを測る。北側には土塁がさらに1条遺存しており、その間に深さ3.6mの堀が残る。郭の東側にも堀が残存しており、別の曲輪がさらにもう1つ付設していた可能性もあるが定かではない。

城主は、江戸通高の子金永を祖とする赤尾閑氏とされる（『内原町史 通史編』）。通高は、元中4年（1387）の難台山城（0382）の戦いで功績を挙げ、江戸氏が水戸地域に進出する契機を作った武将である。赤尾閑城もこうした江戸氏の水戸地域進出に伴う支城の一つとして機能したものと思われる。（関口）



赤尾閑館跡構造図 五十嵐雄大 2022.11.22

みゆやかたあと
0416 三湯館跡 水戸市三湯町 現況：山林、寺社境内地 別称：湯網城 地図 35

常磐線内原駅の北西約 700m、常磐線と国道 50 号線に挟まれた地にある掲林寺一帯にある。標高は 40m、水田地帯の微高地にある。

遺構は、掲林寺本堂北側の山林の中に高さ約 2m の土壘と幅約 3m の堀が残る。本堂北側の土壘間に虎口が残る。東側には、水をたえたえた水堀が残る。

墓地内に土壘、堀が延びており、現在は一部、その痕跡が確認できる。かつては、二重方形館であったようであり、外郭が 110m × 150m ほどの規模、内郭が約 75m 四方の規模と推定される。

塙主水正政武の居城と言われている。(五十嵐)



三湯館跡縄張図 青木義一 2020.9.10

こばやしかたあと
0418 小林館跡 水戸市小林町 現況：山林、宅地 地図 35

常磐線内原駅の南西約 1km、笠間市友部地区と境を接する水戸市西端部にある。東の古矢川と西の涸沼前川が流れる水田地帯に挟まれた微高地上の東側にあり、標高は 35m、古矢川沿いの水田地帯からは約 2m 高い。

個人宅周辺に最大幅 1m の土壘と堀跡を確認できるが、所々埋没して全体の遺構は困難である。方形 100m 四方の居館と考えている。

『東茨城郡誌』によると「小林弥次郎の居城後に江戸氏家臣藤枝勘解由が移る。」と書かれている。(五十嵐)



小林館跡縄張図 青木義一 2020.9.10

おがまちいせき
0419 大鋸町遺跡 水戸市元吉田町 現況：畠地、宅地

地図 36

大鋸町遺跡は東茨城台地の標高約 26~27m の北辺に位置し、北は那珂川が開析した沖積低地に接する。遺跡の東側には谷が入り込んでおり、谷を挟んだ対岸の台地には吉田城（0390）がある。

大鋸町遺跡は、縄文～近世の複合遺跡である。城館関連遺構としては幅 6m、深さ 1.8m の箱築研状の 2 重堀・土塁が検出されている（水戸市教育委員会 2010）。他地点でも 12~16 世紀の中世遺物が出土している。下図は、こうした考古学的所見や地形に基づく城館の推定範囲で、規模は南北約 210m、東西約 360m である。

この地に城館があったという文献記録はないが、考古学的所見から城館が展開していたことは疑いない。東接する谷には水戸城から古宿に向かう古道が走っており（吉田城跡参照）、大鋸町遺跡と吉田城は、古道が沖積低地から東茨城台地に上がる要衝を東西両側から抑える立地にある。

したがって、大鋸町遺跡と吉田城（0396）は対の城館として把握していく必要があろう。（閑口）



0420 遠台遺跡 水戸市中原町 現況：山林、畠地、宅地

地図 35

遠台遺跡は縄文～中世の複合遺跡で、鶴足山塊から伸びる標高約 49m の丘陵上に位置する。遺跡は東に桜川、西に古矢川が開析する谷に挟まれた支丘上にあり、谷との比高差は約 10m である。

この地に城館があったという文献記録はないが、発掘調査によって中世の堀が 1 条検出された（水戸市教育委員会 2018）。堀は、東西方向に 100m 以上走る。土層断面は箱築研を呈し、深さは約 3 m を測る。北側には土塁が設けられていた。埋没時期は 16 世紀末～17 世紀前半である。

城館の範囲について、報告書では堀の東西及び北方に入り込む大小の谷によって、南北約 120m、東西約 200m の方形の城館が想定され、江戸氏没落後に佐竹氏が新たに普請した城館であるという説と、佐竹氏の鉢山関連遺跡であるという説の 2 説が提示されている。

遠台遺跡の約 500m 東方には、江戸氏家臣の国井三河守の居館・中原館跡（0413）（南北約 120m、東西約 50m）がある。遠台遺跡と同一の支丘上に立地しているが、相関関係は不明であり、本支丘上における発掘調査の進展が待たれる。（閑口）



またぐまじょうあと
0422 全隈城跡 水戸市全隈町 現況：山林

地図 30

全隈城は、鶴足山塊の東縁、鎌歎状に張り出す標高約40~60mの細長い尾根上に位置する。田野川が開析する谷との比高は西に向かうほど高くなる。水戸市内で尾根を利用した城館は珍しい。

城は東西長約370mの尾根を4条の堀切によって分断し、I~III郭の曲輪を作り出している。I郭（主郭）の規模は幅約20m、長さ約75mを測る。周囲は土塁が廻り、斜面には帶曲輪が付設される。また全隈城の南側には弁財天跡と伝わる微高地があるが関連は不明である。

城の文献記録はないが、『続茨』では江戸氏家臣で全隈村を治めていた富田氏や蘭部氏を城主に比定している。傾聴すべきであろう。一方、全隈の集落が南に展開することから、集落の詰城（村の城）である可能性もあり、城館の性格は今後の課題である。

（閑口）



全隈城跡縄張図 高橋宏和 2017.1.21 (『続茨』より転載)

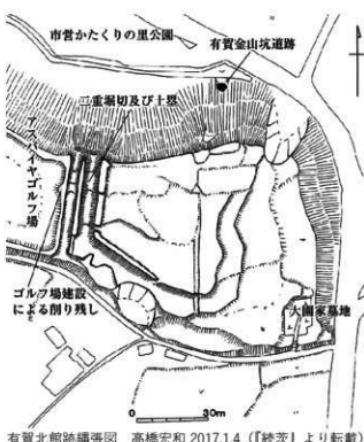
ありがきたやかたあと
0423 有賀北館跡 水戸市有賀町 現況：山林、畠地

地図 35

有賀北館は、鶴足山塊から伸びる丘陵のうち、桜川に開析された標高約60mの支丘東縁に位置する。北・東側には開析谷が広がり、南側にも小規模な谷が入るため、西から東に向かって舌状に張り出す地形となっている。比高差は約10mである。

館の規模は東西約40mで、舌状地形の根本を分断するように南北方向に二重の堀切が残っている。堀幅は5m、深さは2mを測る。堀の東側（内側）に土塁を伴う。

有賀北館の文献記録は残っていないが、有賀城主木村美濃守家臣の根本氏・綿引氏のいずれかとする説がある（『続茨』）。本城館の北側斜面には佐竹氏が経営したとされる有賀金山の坑道が残る。また本館と同一の支丘にある遠台遺跡（0420）でも鍛冶関連遺物が出土していることから、佐竹氏の鉱山開発との関連を含めて、今後検証していく必要がある。（閑口）



有賀北館跡縄張図 高橋宏和 2017.1.4 (『続茨』より転載)

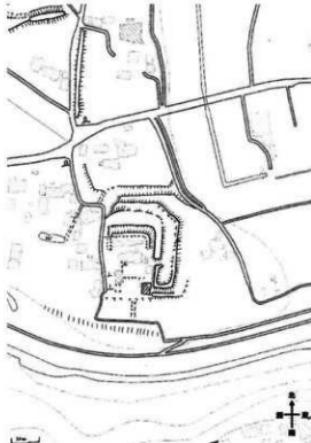
おつぼねやしきあと
0424 御局屋敷跡 水戸市藤井町 現況：山林、宅地

地図 30

藤井川にかかる工兵橋の北東に広がる集落一帯を指し、十万原台地から続く台地最先端部に位置している。「水府志料」によると、藤井川（当時は入野川）の物流拠点として、小勝・塩子までの荷物を水戸や海老沢などへ運搬する河岸が城の東にあり、藤井区の支配と物流拠点であった。

主曲輪の民家敷地には、高さ最大約2mにもなる土塁が北西から南東まで廻り、その外側を幅約4mの堀跡が残っている。さらに、外側に同規模の堀跡らしき段差があり、二重の堀に囲まれていたように見える。また、民家より北西の場所には道路がクラシクした場所があり、大手道と考えられる。周囲には、民家が軒を連ねていて周囲に堀跡や土塁跡が見られる。

本館は南北朝時代に佐竹義篤の末子義実が藤井に住み、藤井又次郎義質と名乗ったとされる（『水戸市史 上巻』）。城の北西に字小坪があり、こちらに義実の母御局屋敷があったといわれている。（五十嵐）



御局屋敷跡縄張図 五十嵐雄大 2022.11.29

たやじょうあと
0425 田谷城跡 水戸市田谷町 現況：畑地、宅地ほか

地図 30

県道169号線と県道63号線が交差する比高約5mの微高地に位置している。田谷集落内に土塁や堀跡と溝が所々残っているにすぎない。

また、地元の方の話によれば、IVの所にはコの字型状に土塁が残っていたという。このことから、かつては5つの曲輪があったと思われる。

『水戸市史 上巻』によれば、田谷五郎の居館跡とされる。また、永享2年(1430)5月2日に田谷城合戦があったが（山川2017）、この合戦の舞台がこの場所か東の田谷白石城(0403)かは不明である。（五十嵐）



田谷城跡縄張図 五十嵐雄大 2021.6.20 協力者：菊池社一

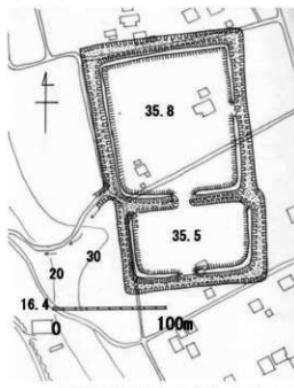
あがわじょうあと
0426 安川城跡 水戸市上国井町 現況:畠地 別称:国井城

地図 30

那珂川左岸の河岸段丘上の標高 35m に位置している。現在、遺構は畠地で埋没しているが、1961 年航空写真 (MKT611-C13-8) に郭のソイルマークを確認できる。それによると、かつて二つの曲輪があった。『茨城の古城』によると、南北 187m、東西 150m の広さだったといわれている。

平安時代に源賴信の男義政が築城し、国井五郎源義政と名乗るようになったのが城の始まりである。南北朝時代に国井氏は南朝方に属したために没落し、奥州白川に落ち延びた。国井氏の没落後の国井保は佐竹氏の支配下となり、佐竹 5 代重義（義重）の弟義茂が南酒出に分家し、さらにその孫泰義が安川城に入つて国井氏を名乗るようになったという。一方で、難台山合戦後の明徳 2 年（1390）に小野崎氏が安川城周辺の下阿川を恩賞地として貰っていることから、小野崎氏に関わる館の可能性もある。

城の南 1 km には、国井堀切といわれる台地を分断する堀状遺構が見られる。（五十嵐）



安川城跡縄張図 青木義一 2020.11.11

ひらとやかたあと
0427 平戸館跡 水戸市平戸町 現況:寺社境内地 別称:平戸氏旧宅

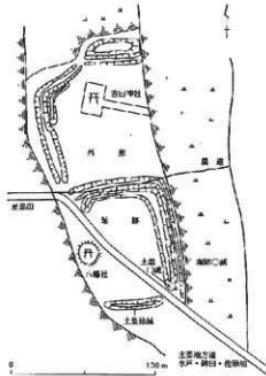
地図 44

平戸館は、涸沼川と那珂川が開削した沖積低地上に位置し、水戸市内でも数少ない低地の居館跡である。館跡は吉田神社の社地となっており、標高約 3m の微高地（自然堤防か）となっている。館周辺は田園が広がり、比高差は約 1~1.5m である。

現在は、吉田神社の東側にわずかに土壘と堀の痕跡が認められる。『常澄村史 地誌編』によれば、かつては約 2 万 m² の規模があったが、昭和 53 年の土地区画整理事業で失われたという。現状の遺構の残存状況では縄張の把握が難しいため、『村史』所収の縄張図を掲げた。これによれば南北約 170m、東西約 80m の範囲の土壘・堀が認められ、南側に主郭、北側に外郭がある。郭曲輪の四方を土壘・堀で囲繞していた。

『新編常陸國誌』によれば、平戸館は応永年間（1394-1428）に平戸甚五郎が構えた居館で、平戸氏は大掾氏一族の石川太郎氏胤の子孫であるという。

平戸館周辺は、『常陸國風土記』にある平津駅家の比定される古代の重要遺跡（大道端遺跡）でもあり、古代駅家のあった要衝の地を抑えるため、大掾氏が居館を築いた可能性がある。（関口）



平戸館跡縄張図 (『常澄村史 地誌編』より)

もりとやかたあと
0428 森戸館跡 水戸市森戸町 現況：太陽光発電所

地図 44

那珂台地と涸沼川に注ぐ石川川との支流の沢によって削られた台地先端部にあった。

現在は、ソーラーパネル発電所のため立入禁止であり、またそれ以前の土砂採取のため、遺構は煙滅したとみられる。

『重要遺跡調査報告書II』に掲載されている地籍図を見ると、堀に囲まれた単郭の居館の跡が分かる。長軸 100m くらいの館であったと思われる。

常陸平氏の一族盛戸氏の居館であったといわれている。(五十嵐)



森戸館跡略測図 (『重要遺跡調査報告書II』より転載)

ふじいじょうあと
0431 藤井城跡 水戸市藤井町 現況：山林

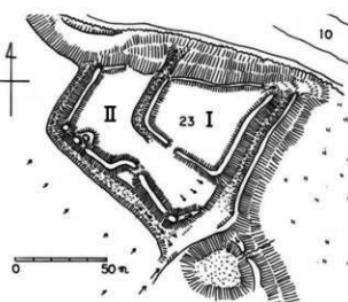
地図 30

藤井城は、鶴足山塊から続く標高約 20~30m の丘陵上に位置する。藤井城の東側は那珂川支流の西田川が開析する谷があり、藤井城のある丘陵は河岸段丘に鋭角に突き出る地形となっている。谷との比高差は約 10~20m である。

規模は東西約 120m、南北約 120m を測る。曲輪は I・II 郭に大別される。主郭である I 郭は北東側にあり、周囲に土塁を廻らし、東・西・南側に堀がある。II 郭は I 郭の南・西側を取り囲むように L 字状の平面形を呈する。四方を土壁で廻らし、東・西・南側に堀がある。

藤井城についての文献記録はないが、城郭を含む周囲の丘陵一帯は十万原遺跡の包蔵地となっており、同遺跡からは 15 世紀後半から 16 世紀前半の中世遺構群が検出されている(茨城県教育財團 2001・2002)。中世後期のこの地は江戸氏の支配下であったことから、藤井城も江戸氏支城の一つであった可能性が高い。

なお、谷の対岸には那珂西城(0337)があり、中世後期は佐竹氏の支配下であった。主家の佐竹氏に反抗を繰り返していた江戸氏にとって、那珂西城に対峙する目論見のもと藤井城を構えたものと考えられる。(閑口)



藤井城跡縄張図 青木義一 (一部追記)

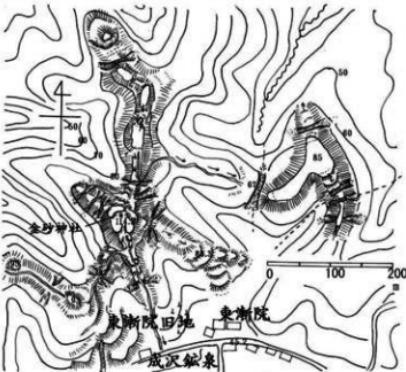
なるきわようがいあと
0437 成沢要害跡 水戸市成沢町 現況：山林

地図 30

成沢鉱泉がある東漸院の北側にある標高 114m の山頂を中心にした山城である。遺構としては、標高 114m の西城、標高 85m の東城に分かれる。

西城の主曲輪に金砂神社が鎮座し、東側に虎口が残っている。尾根沿いに堀切が多数設けられている。東城の主曲輪は L 字型の曲輪で、こちらにも尾根沿いに堀切が設けられている。直線距離は南北 800 m、東西 600 m である。

歴史は不詳。成沢は江戸領に属していく、すぐ北側の藤井が佐竹領であり江戸氏の北側の境目だった。天文 16 年から 20 年（1547-51）にかけて佐竹氏と江戸氏が入野・大部平・戸村で合戦になった際に江戸氏方の陣城になったと思われる。（五十嵐）



成沢要害跡縹図 青木義一 2022.2.10

いいねまじょうあと
0439 飯沼城跡 茨城町上飯沼 現況：山林、公園、墓地、学校敷地 別称：桜井館 地図 43

福性寺の東側の微高地 23m にあり、現在は飯沼城址公園になっている。公園になっている部分が曲輪 I である。現在、曲輪 II・曲輪 III は、墓地や旧茨城町立川根小学校で遺構がかなり改変されている。

伝承では、南北朝時代桜井尊房の城といわれている。応永 2 年（1395）の「淨範檀那書立案」（『米良文書』）には、小田穴戸一族が熊野御師と師壇関係を結んでおり、その中に「飯沼 山城守」とあり、おそらく飯沼城に穴戸一族の山城守がいたと考えられる。福性寺の五輪塔は天正 12 年（1584）の桜井朝尊とその妻、弟の家尊のものと伝わっている。一方、この他境内には、元享 2 年（1322）の常總型の阿弥陀三尊板碑があることから、鎌倉時代から何らかの土地利用があったと思われる。（五十嵐）



飯沼城跡縹図 余湖浩一 2016.8

いしづきじょうあと
0440 石崎城跡 茨城町上石崎 現況：山林 別称：親沢城、上石崎城

地図 43

親沢鼻の比高 15m ほどある台地先端部にある。曲輪 I は長軸 70m ほどの広さがある。台地基部との間には、堀と土塁がある。堀の深さは最大 6m、幅 8m、土塁の高さは曲輪内から 4m ある。南西斜面に開口部 A があって、これが堀切 B につながっている。土塁 C は一段高く、横堀 B がこの部分で横矢を掛けるような構造となっている。I の東寄りの位置には、高さ 1.5m 幅 6m ほどの館ノ山古墳 D があり、旗塚の役割を担っていたと考える。

伝承では、常陸平氏の一族石崎神師房聖道の城といわれている。今残る遺構は、戦国期に対岸の宮ヶ崎城(0441)と共に、潤沼の水運を監視するために江戸氏によって改修を受けた姿と考える。(五十嵐)



石崎城跡縄張図 (原図：余湖浩一 1998.10 を加筆修正)

みやがざきじょうあと
0441 宮ヶ崎城跡 茨城町宮ヶ崎 現況：山林、畠地

地図 43

潤沼南岸の宮ヶ崎地区の台地先端部に築かれている。曲輪 I は、比高 25m の高台に位置し、その周囲に曲輪 II ~ VI が配置されている。曲輪 III は寺跡で五輪塔が出土し、近年まで宿の常光院があった。また、V と VI の間 a に曲輪があったが、近年の土取りで埋没している。曲輪 I の広さは、約 100 m² あり高さ最大 6m の土塁と幅最大 10m 深さ 8m の堀が回っている。1998-99 年に県道 16 号線造成に伴う発掘調査で、b 地点で堀や土橋遺構が、c 地点で堀と喰い違い虎口がそれぞれ確認された。

鹿島平氏の一族宮崎氏の城館と言われているが、今残る遺構から 15 世紀後半に進出した江戸氏が麓の宮崎津を管理するための城館と考える。(五十嵐)



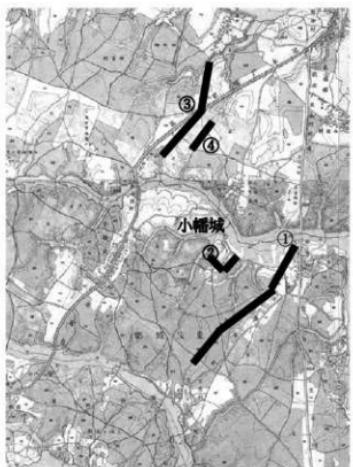
宮ヶ崎城跡縄張図 (原図：青木義一 2004.1.8 を加筆修正)

寛政川右岸とその支流の川に挟まれた標高 26m の台地上に位置する。7 つの曲輪と外曲輪が確認されている。曲輪 I は、南北 58m 東西 66m の逆台形の形をしている。北側に井戸 A が残っている。土塁は高さ最大 6 m あり、南側の虎口 B 以外全周している。虎口の南に曲輪 II がある。II は、北側と南側に土塁があり、北東隅で幅 3 m になる。この土塁上に祠があり、その北側から城下へ続く道が延びている。東側は帶曲輪 C になっているが、これは曲輪 III と曲輪 IV の堀跡 D と接続しているので、元々堀跡だった可能性が高い。III の北西に櫓状の土塁 E がある。これは堀の合流点 Q を認める構造になっている。IV には、西側に突き出した土塁 F があり、堀底に対し横矢が掛けられている構造になっている。IV から北西に向かうと堀を経て土塁 T があり、一部切れている所 s がある。これは太平洋戦争の際、松茸採集の際に土塁を崩したものとの聞き取った。したがって、本来は T から曲輪 V に向けて一つの土塁であった。V には、一段低い場所 G がある。これは、I 曲輪の土塁と対応関係にあることから、土塁を意識して構築されたと考える。V 曲輪の南西に土塁 R があり、堀底に横矢をかけている。この土塁の先に曲輪 VI がある。曲輪 VII は、北側から西側にかけて土塁が残っていて、西側に土橋 H がある。この土橋の先に馬出 J を含む曲輪 VII がある。その先にも土橋があり、外曲輪に接続している。曲輪 VII から北へ向かうと曲輪 VIII がある。VIII には、土塁がほぼ全周して東側の隅に櫓状の土塁 K が残っている。西側には土橋 L があり、ここからも外曲輪に接続している。曲輪 VII から南側には土塁が続き、M で途切れてしまう。しかし、かつてはこの土塁は N まで回っていたことが、1975 年航空写真(CKT7412 -C23-24)でうかがえる。外曲輪は畠地であるが、場所 P ~ O にかけて幅 3 m の城外を分ける土塁と堀跡が残る。P がかつての大手道と言われている。平成 18 年(2006)に一部が高速道路の敷地になり、発掘調査が行われた。15 世紀から 16 世紀にかけて土地利用がなされ、遺構として堀跡や柵列、掘立柱建物跡が確認された。最盛期は 16 世紀半ばと推定され、江戸氏の普請が指摘されている。城の北側に奥ノ谷新堀と奥ノ谷前堀という二本の堀跡、南の山崎地区に大規模な外曲輪堀、さらに 2 km 先に秋葉新堀と呼ばれる堀跡が残っている。奥ノ谷新堀も発掘調査が行われ、幅 6 m の堀跡が検出され、江戸氏の普請が指摘されている。

小田知重の三男光重が鎌倉時代に築城したとも、応永 21 年(1414)以降に大掾氏一族が小幡氏を名乗り築城したともいわれているが定かではない。文明 13 年(1481)5 月 5 日に水戸城主江戸通雅が小鶴原(茨城町)で小田・真壁・大掾・宍戸・笠間などの連合軍と戦った際、小幡氏は連合軍側に属した(江戸軍記)。この戦いの後、小幡氏は江戸氏に属したとみられる。天文元年(1532)に江戸忠通は小幡義清を大洗明神下で殺害し、以降小幡氏は江戸氏に属したとみられる。天文 5 年 4 月 15 日の「小堤光明寺棟札銘写」(「水府志料」)には、大旦那江戸但馬守忠通のあとに旦那として小幡道増とあり、小幡氏が江戸氏の家臣としての活動がうかがえる。永禄年間と推定される「鹿島神宮所領日記」(鹿島神宮文書)に「おはたのよふかい」(=小幡の要害)とあることから、この時期に江戸氏が「境目の城」として整備されたと考えられる。天正 13 年(1585)の第一次府中合戦では、江戸氏家臣の大塚弥三郎と小幡孫二郎が小幡城の「用心仕置」を命じられている。天正 16 年の第二次府中合戦では、江戸氏が小幡城を通って玉里(石岡市)へ向かい、後詰として鹿島・畠田・中居氏ら鹿行の武士が在番している。天正 19 年に佐竹氏が水戸城攻撃で、江戸氏が没落した際に廃城になった。(五十嵐)



小幡城跡縄張図(原図 余湖浩一 2006年を加筆修正)



- ① 秋葉新堀堀切
 - ② 山崎堀切
 - ③ 奥ノ谷新堀堀切
 - ④ 奥ノ谷前新堀堀切
- 迅速図より加筆修正

えびさわやかたあと
うちでやかたあと
0442 海老沢館跡・0451 内手館跡 茨城町海老沢 現況：山林、畠地

別称：海老沢城

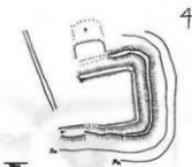
地図 43

涸沼の南西に位置する台地の北端に築かれた城曲輪遺構が海老沢館で、北西側の谷（勘十郎堀）を挟んだ台地上に内手館があり、この二つを合わせて海老沢城という。海老沢館の曲輪Ⅰは、短辺45m長辺75mの台形で、土塁がほぼ全周している。北東側のAに土塁と堀がある。この堀はBで埋没している。曲輪Ⅱの北側は切岸になっている。一方、内手館は長軸100mの正方形であり、堀の深さ最大6m、幅3mで西側以外は残っている。

常陸平氏の一族海老沢氏の名字の地で、戦国時代には、天古崎城（茨城町南島田）に移っている。
(五十嵐)



海老沢館跡縄張図 岡田武志 2016.1.22 を基に加筆



内手館跡縄張図 五十嵐雄大 2022.6.12

とりはた（とつけた）じょうあと
0443 鳥羽田城跡 茨城町鳥羽田 現況：山林、畠地

地図 51

逆川左岸の台地先端部に築かれた標高28m比高10mの丘城跡である。曲輪Ⅰは、現状帶曲輪C・Dに囲まれた所に位置していて、短辺42m、長辺55mの広さがある。この帶曲輪は、E、G、Hの堅堀で仕切られている。曲輪Ⅰの西側に曲輪Ⅱ、曲輪Ⅲを配置している。中心になっているのはこの三つの曲輪で、物見台と思われるIV、外曲輪と思われるV、根小屋と思われる腰曲輪VI・VIIが残っている。VIとIの間には堅堀Fがあり、登城路と思われる。IとVIには、IVの出入り口にAの喰い違い虎口が残っている。また、Bは、堅堀二つに囲まれた出丸のような独立した曲輪になっている。

常陸平氏の一族鳥羽田氏の居館跡といわれている。鳥羽田氏は応永19年(1412)円福寺大般若經奥書に「鳥膺孫次郎」と確認され、15世紀にはこの地の領主をしていたものと思われる。(五十嵐)

鳥羽田城跡縄張図 五十嵐雄大（協力者 大野地夫）
2021.11.20

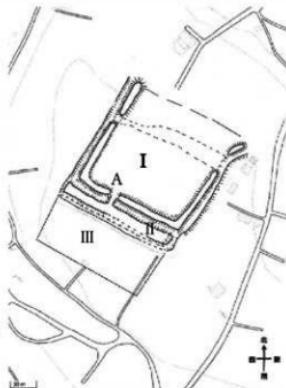
あがけやかたあと
0444 網掛館跡 茨城町網掛 現況：山林、畠地

地図 43

涸沼南岸にある網掛地区の標高 30m の台地上にある丘城である。三つの曲輪で構成されていて、曲輪Ⅰは、高さ 3 m の土壁と幅 5 m の堀がある。一部耕作による削平が見られるものの、北側を除いて残存している。曲輪Ⅱは、長方形の曲輪で南側の虎口 A でⅠに接続している。曲輪Ⅲは、耕作で煙滅している。

城主などの伝承は不明。明応 3 年(1494)後と推定される「領知違乱書付」には、小貴式部大輔が違乱された地に「あかけ」とあり、佐竹の乱(山入の乱)以前までは、佐竹氏家臣小貴氏の領地であったが、江戸氏によって違乱されたことがうかがえる。また、「佐竹義舜家譜」に、天神林氏の家臣として網掛氏の名前があり、網掛氏の館の可能性がある。周囲には、館下やウサギなど関連地名が残り、城域はもう少し広がっていたと思われる。

(五十嵐)



網掛館跡縄張図 五十嵐雄大 2022.7.12

てごさきじょうあと
0445 天古崎城跡 茨城町南島田 現況：山林、寺社境内地

地図 43

県道 16 号線の「神宿」バス停から西側にある丘陵の南端にある標高 23.1m 比高 10m の台地上に築かれている。城は、二つの曲輪で構成されている。曲輪Ⅰは長軸 70m ほどの曲輪で、中央南部に方 7m の櫓台遺構のような土壇がある。ここに稻荷神社が鎮座している。北と西に横堀を設けている。深さ最大 6 m、幅 6 m あり、曲輪間を仕切っている。曲輪Ⅱは、南北に長い長方形のような形をしている。神社の参道沿いの土壁付近 A で折れていって、この辺りが虎口の名残と思われる。

『茨城町史 地誌編』には、天正年間の城主は、海老沢弾正忠といわれている。海老沢弾正忠は江戸氏の家臣として天正 16 年(1588)第二次府中合戦に出陣し、江戸重通から感状をもらっている。海老沢弾正忠は、南島田・海老沢・鳥羽田・神宿を領していて、名字の地である海老沢から移ってきたものと思われる。(五十嵐)



天古崎城跡縄張図 (原図：余湖浩一 1996.10 に一部加筆)

みやがさきやかたあと
0446 宮ヶ崎館跡 茨城町宮ヶ崎 現況：山林、畠地 別称：きゅうでん堀、古館 地図 43

宮ヶ崎城(0441)の南方 250m に位置する。高さ 4m の土壘と幅 4m、深さ 2m の堀が、北側から東側にかけてほぼ完存し、西側に一部残っている。南側は耕作によって煙滅している。南北 140m、東西 100m の規模を持つ。

『茨城町史 通史編』によれば、宮崎氏の居館跡と推定されている。居館の北側には鹿島神社が、居館の南側に「カチヤ前」という地名があり銀治職人を想定する地名がある。また、その先には広大な谷津田があり、宮崎氏の直営田の可能性がある。菩提寺常光院やその奥の祐善館や宮崎宿との関連から、館を含む一帯が都市的な集落を持っていたことが伺える。(五十嵐)



宮ヶ崎館跡復元図 青木義一 2004.1.8

やたべじょうあと
0447 谷田部城跡 茨城町谷田部 現況：山林、学校敷地 地図 43

涸沼前川と涸沼川の合流点の北側にある台地上に位置している。茨城町立明光中学校敷地になっている。明確な遺構は、学校南側の墓地の一部に外曲輪の一部と思われる土壘 a が残っていてその他は煙滅している。1947 年航空写真 USA-R636-197 には、方形居館や外堀の跡を示すようなソイルマーク(A・B)を確認できる。

2008 年のグラウンド拡幅に伴う発掘調査では、豈堀 C が検出された。この豈堀は、土壘 a と繋がっていたようで、城内と城外を区画していたものと思われる。

常陸平氏の一族谷田部氏本貫の地である。谷田部氏は戦国時代には水戸城の江戸氏の宿老の一人になり、水戸城(0396)内に移り、この館は廃絶されたと考える。(五十嵐)



おくやじょうあと
0449 奥谷城跡 茨城町奥谷 現況:畠地

地図 43

涸沼川からの比
高16mの台地上に
あり繩文からの複
合遺跡奥谷遺跡内
にある。昭和61年
の発掘調査報告書
によると、コの字
型の堀が検出され
た。箱築研の形状
をしていて、上幅
最大5m、深さ1
mあった。井戸跡



奥谷遺跡復元図 五十嵐雄大 2022.7.12. 地図 MKT6110-C23-3

や土師器質土器、常滑壺破片が出土し、16世紀頃の居館跡と推定されている。1961年航空写真MKT6110-C23-3では、館の範囲を示すソイルマークを見ることができる。このことから一辺100mの方形居館であったことが伺える。『茨城町史 地誌編』では、堀が出土した一帯が堀ノ内と呼ばれている。

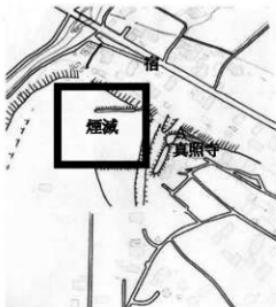
天文5年(1516)4月15日「小堤光明寺棟札銘写」(所取 水府志料附録)に「旦那」として「奥谷鳥膚大隅守増貞」とあり、奥谷城主が近くの鳥羽田城(0443)の鳥羽田氏の一族だったことがうかがえる。(五十嵐)

かみやどじょうあと
0450 神宿城跡 茨城町神宿 現況:畠地

地図 43

県道16号線の南側の比高10mにある真照寺の西側の畠地一帯にある。宿を見下ろす台地先端にあつた。昭和30年頃からの耕地整理で遺構は埋滅しているが、1948年航空写真USA-R836-49では、北側と南側に土塁の痕跡、東側に堀跡を確認することができる。100mの方形居館と考えられる。また、真照寺の西側には真照寺古墳Aがあり、この古墳が寺域を囲んでいる。このことから、出城の可能性があるが推測の域をでない。

鎌倉時代に鹿島成幹の次男保幹が土着し、神谷戸氏を名乗ったが、すぐに廃絶した。その後、南北朝時代に畠田重幹の次男胤幹が亀谷田左近持監と名乗り土着したとされる。(五十嵐)



神宿館縄張図 五十嵐雄大 2022.6.1. (USA-R836-49を基に修正)

おづみじょうあと
0452 小堤城跡 茨城町小堤 現況:畠地

地図 43

潤沼川の南側比高 20m の台地先端部一帯に築かれていた。確認できる遺構はないが、北東にタイコ塚とよばれる塚があり、昭和 52 年に備蓄



と思われる 小堤城跡復元図 五十嵐雄大 2022.7.12 原図: USA-R836-51
宋銭 5200 枚が発見されている。1948 年航空写真 USA-R836-51 には、城跡を示すと思われるソイルマークを確認できる。150m四方の方形居館のようだったと思われる。

『新編常陸国誌』によると小堤越後守の居館と伝えられている。天文 5 年(1536)4 月 15 日「小堤光明寺棟札銘写」(所収「水府志料」)に「且那」として「小堤平三郎」なるものがいる。光明寺は小堤宿の北東、館の南西にあった時宗寺院で、何らかの関わりがあったと思われる。(五十嵐)

おおどじょうあと
0453 大戸城跡 茨城町大戸 現況:山林、畠地、宅地

地図 43

潤沼前川とその支流によって開まれた比高 23m の台地先端部に築かれている。かつては二曲輪あったと考えられる。『新編常陸国誌』に記載されている陣所跡と推定される。

曲輪 I には、土壘や横堀が巡っている。南側には馬出状虎口がある。土壘の高さは最大 6m、横堀は幅 5m、深さ 4m ある。馬出状虎口から続く南側の道を降りると根小屋と考えられるスペースに続く。近くには、支城のニシヤシキ・大戸館・門口の砦や遠堀の痕跡も確認できる。

史料上では、天正 17 年(1590)4 月 18 日の江戸重通書状文から「大戸口」という呼称が見られる。これは、大戸城口と考えられ、この時期に江戸氏によって整備された城曲輪と考えられる。

城跡の東に椿坂があり、陸前浜街道の旧道と伝えられている。潤沼前川の渡河点と水戸城から小幡城へ向かう道を押さえる目的のために築かれたと考える。(五十嵐)



大戸城跡縄張図 五十嵐雄大 2022

かみいしだきとうじょうあと
0455 上石崎登城跡 茨城町上石崎 現況：山林、畠地

地図 43

涸沼を望む低地との比高約15mの台地先端部にある。県道50号線が遺構を分断している。

西側の一部と北側に土塁A・Bが残り、堀跡とみられる最大幅7mの段差が北側から南側に渡って残っている。南側の切岸は6mあり、城内外を仕切っている。本来の登城道は、北側の土塁Aから回って入っていたようである。本来の構造は、二曲輪あったようであるが、耕作による改変で判別できない。

城の南側の地名が船渡で、旧道Cは城の西側を回っている。城は船渡とこの道を扼す場所に位置している。このことから、涸沼の舟運と道の管理を目的とする城だったと考える。なお、『城郭体系』には、上石崎城の記載があるが、本城との関係は不明である。(五十嵐)



上石崎登城跡跡張図 五十嵐雄大
2021.1.15 (参考 高橋宏和提供図)

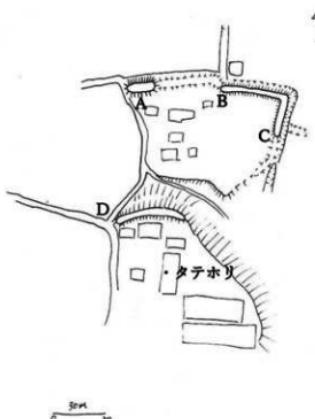
ふくらじょうあと
0456 福蔵城跡 茨城町中石崎 現況：山林、畠地、宅地 別称：福良館

地図 43

中石崎公民館から南東300mにある若宮川に注ぐ支流の川によって削られた台地先端部に築かれている。

西側に高さ5mの大土塁Aが東に10m延びていて、この土塁が徐々に小さくなりながらもBまで続いている。Bの土塁は高さ1mほどで外側に幅1mの堀がCの所まで巡っている。Cは堅堀になって下る。また、Dの所にも土塁が残っている。Dの南側の屋号が「タテホリ」で、かつて堅堀があったことが想定され、ここまでが城域と考えられる。

地元伝承では、上石崎の一心院が移転する前の寺跡といわれている。永享7年(1435)に作成された「富有人注文」には、福良の富裕人に荒太郎がいることが確認され、この人物の館跡と思われる。(五十嵐)



福蔵城跡跡張図 五十嵐雄大 2020.3.19

のそじょうあと
0457 野曾城跡 茨城町野曾 現況:宅地 別称:大高城

地図 43

県道 16 号線と県道 59 号線が交差する工業団地南信号から北西に約 187m の地点にある。潤沼川からの比高 40m の高台に築かれている。民家周間に 2 m の土塁 A がこの字型に残っている。

地元伝承では、大高城と呼ばれている。大高氏は、天正 18 年(1591)12 月の佐竹氏の水戸城攻めの折、江戸の方の討死者に「大高山城守」と記載があり、この人物の居館の可能性がある。『茨城町史地誌編』によれば、城之内・城屋敷・城跡屋敷・城やしきノ上・代官屋敷といった地名があったとしているが、現在いずれも消滅地名である。

県道 16 号線を挟んで南側対岸の台地先端部に前方後方墳の宝塚古墳があり、城跡本体よりも潤沼川流域の展望が大変利く場所にあることから、物見台あるいは祭祀にまつわる場所として機能していた可能性がある。(五十嵐)



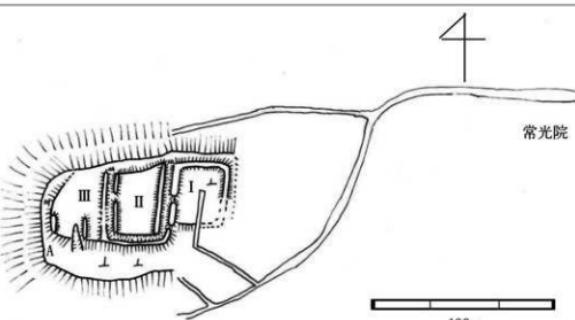
野曾城跡縄張図 五十嵐雄大 2021.2.10
(参考 高橋宏和・余湖浩一提供図)

みやが崎ゆうぜんじょうあと
0459 宮ヶ崎祐善城跡 茨城町宮ヶ崎 現況:山林、墓地

地図 43

宮ヶ崎台
地の西端先
端部で、潤沼
に注ぐ支流
からの比高
19 m に築か
れている。

墓地に伴
う改変で遺
構の一部が
削られてい
るが、東西
およそ 150m



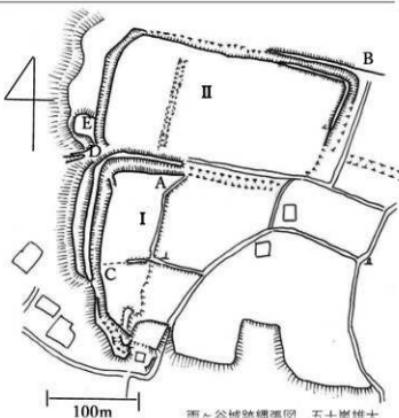
宮ヶ崎祐善城跡縄張図 五十嵐雄大 2020
の広さに三つの曲輪で構成されている。土塁の高さは、曲輪 I で高さ 3 m、堀は幅 2 m、深さ 1 m ある。曲輪 III の西端に坂虎口遺構 A があり、大手遺構と考える。

歴史は不明。宮崎宿に近いことから、宿の管理を行っていたと考える。また、城内の墓地内に中世五輪塔が残っている。(五十嵐)

あまがやじょうあと
0461 雨ヶ谷城跡 茨城町上雨ヶ谷 現況：山林、畠地 別称：雨ヶ谷長者屋敷 地図 51

巴川とその支流の黒川に挟まれた比高約20mの台地先端部を利用して築かれている。現状では、AからCにかけて幅約7m、深さ最大約2.5mの横堀を巡らせた曲輪I、BからDにかけて幅4m深さ最大2mの横堀と高さ1mの土塁で囲まれた曲輪IIが残る。曲輪Iの東側と曲輪IIの南側は畠地による改変で埋滅していて、本来の曲輪は、より東に広がっていたと考える。Dは堀底道になっているが、かつては堅堀だったと考える。このDを見張るように切岸で囲まれた独立曲輪Eがある。

平安末期に石川(河)家幹の三男秀幹が天神三郎と名乗り居住したことによるとする。現在も、城跡の台地南側下の集落に天神家(てんじん)が多数住んでいる。一方、「水府志料」によれば、藤枝長門という人物の居所だとしている。なお、伝承では奥州征伐の行き帰りに立ち寄り最後は滅ぼした八幡太郎義家の長者伝説が残っている。(五十嵐)



雨ヶ谷城跡縄張図 五十嵐雄大

2021.6.12 (参考 高橋宏和・余湖浩一提供図)

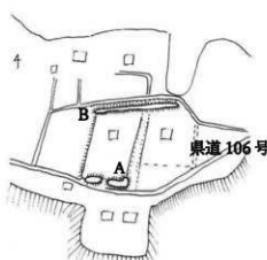
なかいしおきさんじょうやかたあと
0462 中石崎三条館跡 茨城町中石崎 現況：山林、畠地、宅地

地図 43

涸沼の北岸の台地上を通る県道106号線を上石崎方面から東の涸沼自然公園方面に抜けると途中にある標高27mの地点である。

南側の土塁Aの高さが約3m、民家の入口で分断されているが、東西方向に東側に約30m、西側に約20m続いている。この残存土塁から北に約100m行った民家の裏手に東西に堀Bと土塁が約100m続く。堀は東側の谷津が入り込んだ若干低地になっている部分にまで延びている。本来は少なくとも二つの曲輪があったようと思われる。

伝承は不明。当遺跡は、三条遺跡という縄文時代からの複合遺跡に包摂されている。「三条(さんじょう)」とあるが、「御城」の転訛と考える。東1.5kmには、石崎氏の崇敬社の芝崎神社があり、鬼門の役割があったと考える。(五十嵐)



中石崎三条城縄張図 五十嵐雄大 2021.1.15

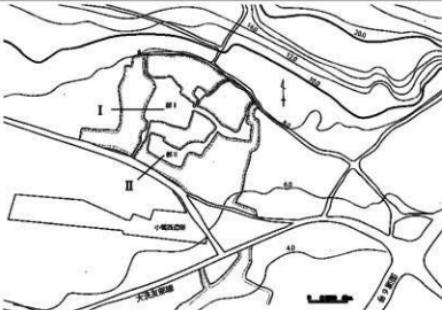
こづるやかたあと
0464 小鶴館跡 茨城町小鶴 現況:水田、畠地、宅地

地図 43

小鶴館跡は、涸沼川左岸の標高5～28mの微高地から台地上に位置する。水戸や宍戸から小鶴へ向かう街道の交差部に所在する。併せて涸沼川や涸沼前川の水運を押さえる交通の要衝でもある。

「小鶴年代記」には、弘安3年(1280)に大掾氏旗下の小鶴修理之介が「倉作」に居城を構え、応永20年(1413)の江戸氏侵攻によって、江戸氏の領分となつた記述が見られる。

しかし、倉作には城館跡と考えられる区画ではなく、台地南方の微高地に一辺50m程の方形状の曲輪Iとそれを囲む空堀や曲輪IIが存在し、小鶴館跡の可能性がある。また、令和3年度から調査がおこなわれている小鶴西遺跡では、城館跡に関わる考えられる遺構が複数箇所で確認されており、広域に構築された城郭であった可能性がある。永享7年(1435)の「常陸國富裕仁注文」には宍戸氏の家臣と思われる龍崎氏の知行になっていることから、境目の城として改変されたものと考えられる。なお、台地上の小河原コンクリート付近には館の詰所が存在したものと思われる。(田村)



小鶴館跡縄張図 田村雅樹 2022.11.23

まえだじょうあと
0465 前田城跡 茨城町前田 現況:山林、宅地

地図 43

県道40号線と北関東自動車道が交差した地点の南側約250mの場所で、南に涸沼川を望む台地先端部にある。

現在、館跡は民家敷地となっている。民家北側に幅2mの土塁付き堀跡が残っている。かつては広さ約50m四方に土塁や堀を巡らせた方形館だったようである。

この地は、平安末期ごろに吉田平氏から分かれた前田氏の居館跡といわれている。前田地内からは、13世紀に南宋で造られた青白磁蓮牡丹文梅瓶が出土していて、かなりの有力者がいたことが推定される。この遺跡は、その有力者の居館跡と考える。(五十嵐)



前田城跡縄張図 五十嵐雄大 2022.5.20

とじょうやかたあと
0472 登城館跡 大洗町大貫町登城 現況:山林

地図 44

登城館は、鹿島台地北側の大貫台地と通称される標高約36mの台地上に位置する。南北に細長く続く鹿島台地の北辺にあって、東は太平洋、西は涸沼及び涸沼川が開析する広大な沖積低地に挟まれる。北側の現大洗市街地も低地で、大貫台地は三方を水に囲まれるとともに、北側と西側から大小の支谷が入り込み、リアス状の複雑な台地地形となっている。

登城館の規模は南北約380m、東西約210mを測る。曲輪はI～Vの5郭に大別される。1998-99年に発掘調査が実施されている(III郭以外:大洗町大貫台地埋蔵文化財発掘調査会2001/III郭:同調査会2000)。主郭のI郭は南北約85m、東西約75mで堀が囲繞する。北西隅に掘立柱建物跡が検出されており、ここを居館としたようである。遺構は粘土張墓坑や方形竪穴、地下式坑が主体で、建物跡は少ない。また曲輪内にも大小の堀が走っていた。遺物は、15世紀後半～16世紀前半が主体である。

文献記録では応永5年(1398)に下總千葉氏一族の大貫氏が築城したとの記載があり(『西光院由来記』)、これを登城とする見方が強い。大貫氏は大塚氏・江戸氏に従属したとされる。大貫台地には「大貫城跡群」と総称される4城館(登城館・一杯館・後新古屋館・龍貝館)が集中し(『続茨』)、登城はその中でも最大の規模を有していることから、大貫氏の居城を見て良いだろう。(関口)



大洗町大貫台地埋蔵文化財発掘調査会 2001

りゅうがいやかたあと
0473 龍貝館跡 大洗町神山町 現況:山林

地図 44

龍貝館は、鹿島台地北端(大貫台地)の標高約27～30mの台地上に位置する。大貫台地は南北に入り込む支谷によって東西に二分され、東台地縁に一杯館(0471)・登城館(0472)が、西台地縁に龍貝館(0473)・後新古屋館(0477)が分布する。龍貝館の南北側には小支谷が入り込み、東は涸沼川が開析する沖積地となり、独立した台地となっている。

龍貝館の規模は南北約50m、東西約50mを測り、平面はほぼ正方形を呈する。東側は斜面地であり、西・南側に土塁が廻る。

谷を挟んだ対岸の台地に大貫氏の居城とみられる登城館がある。龍貝館の規模は大貫城跡群の中でも最も小規模であり、登城館の支城の一つとして機能していたと考えられる。(関口)



龍貝館跡調査図 高橋宏和 2017.1.28(『続茨』より転載)

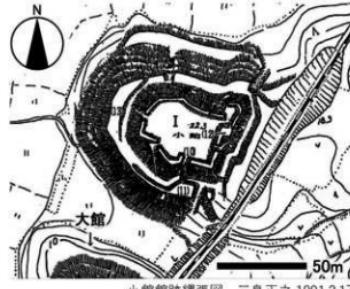
こだてやかたあと
0474 小館館跡 大洗町成田町 現況：山林

地図 44

小館館は、鹿島台地北側に位置する。館の西側には潤沼・大谷側に開析された沖積低地が広がり、鋸歯状に小支谷が入り込む。小館はこうした小支谷が南北に入り込んだ、標高約 20~25m に舌状台地の突端に占地している。沖積低地との比高差は約 20m である。

館の規模は、舌状台地全体を館として捉えると東西約 100m、南北約 120m の半円形を測る。主郭である I 郭の規模は 40m、南北約 26m と極めて小規模である。土塁が環繞し、南側に虎口がある。斜面中段には帶曲輪が廻る。遺構の残存状態は絶じて良好である。東側を走る鹿島臨海鉄道は切岸状になっているが、鉄道敷設前には II 郭があった（大洗地区遺跡発掘調査会 1978）。

小館館の城主について、文献上の記録はない。小館館は 2 次の発掘調査が行われているが、年代的な決め手に欠ける。鹿嶋氏が築いた可能性も否定できないが、繩張の形状から 15~16 世紀の城館とみるのが穏当であり、現状では江戸氏の支城の一つとして捉えておきたい。谷を隔てた南側には大館館跡（0475）が遺地していることから、両館は二つで一つの城館と考えるべきであり、潤沼南岸を通って南北に向かう道を抑える目的があったのではないか。（関口）



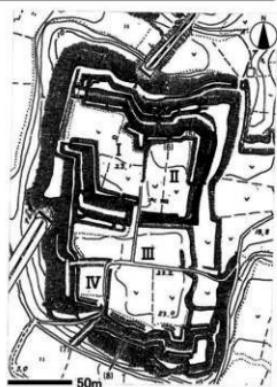
おおだてやかたあと
0475 大館館跡 大洗町成田町 現況：畠地

地図 44

大館館は、鹿島台地北側、標高約 20~25m の舌状台地突端に位置する。北側には小支谷が入り込み、この谷の対岸（約 50m 先）の台地上には小館館（0474）がある。立地は小館館とはほぼ同じであり、両館は二つで一つの防禦施設と捉えた方が良い。西側には潤沼を望み、潤沼沿岸の交通を抑える目的があったものと考えられる。

館全体の規模は舌状台地全体を含めると南北 250m、東西約 200m を測り、小館館の 3 倍以上の面積である。曲輪は I~IV の 4 郭に大別される。主郭と見られるのが I 郭で、東西約 50m、南北約 60m の鍵形を呈する。II 郭は I 郭より一段下がり、I・II 郭の周りを土塁・堀が囲む。南側には III・IV 郭があり、その南側斜面には二重の堀や竪堀など、手厚い防禦構造が認められる。

大館館の文献記録はなく不明な点が多いが、小館館同様、繩張の形態は 15~16 世紀のものと考えられ、江戸氏の支城の一つとして機能したと捉えるのが自然である。（関口）



たてやまやかたあと
0476 館山館跡 大洗町成田町 現況：山林

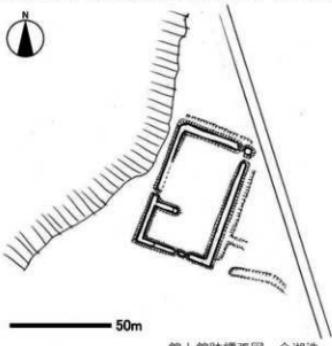
地図 44

館山館は、西に涸沼・大谷川、東に太平洋に挟まれた、標高約 39m の鹿島台地上に位置する。北側に小支谷が東西に入るほか、西側斜面は齶歯状の小支谷が複雑に入り込み涸沼に接する。

館跡の近辺はゴルフ場や日本原子力研究所等により開発されているが、館周辺はアカマツ林として残され、遺存状態は良好である。館の規模は東西約 65m、南北約 87m の方形を呈する。周囲は高さ 0.5~1.7m の土塁と深さ 0.4m~0.7m の堀が囲繞する。中央や南よりに東西方向の土塁が走り、郭内は南北に分かれている。

館山館についての文献記録は残っていないため、城主等の来歴は不明である。中世には、この地は成田郷と呼ばれ、江戸氏の支配域であった。館の東にある夏海湖周辺には集落が形成されていたという（『大洗町史 通史編』）。館は、成田郷を治める小領主の拠点であったのかもしれない。

館の西側の台地端突には、大館跡（0475）と小館跡（0474）がある。極めて近い範囲に 3 つの城館が築かれていることから、相互の関連性を注視しつつ、成田郷中における城館と中世景観を復元していく必要がある。（閑口）



館山館跡縄張図 余湖浩一

うしろしんこややかたあと
0477 後新古屋館跡 大洗町神山町 現況：山林

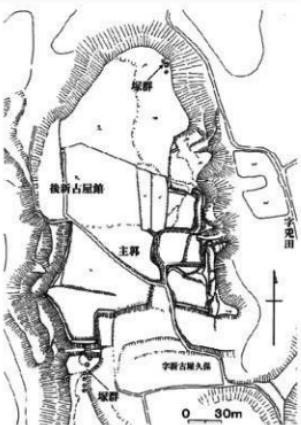
地図 44

後新古屋館跡は、鹿島台地北端（大貫台地）の標高約 31m の台地上に位置する。台地東側は谷地となり、北・南側も小支谷があり混む。南は沖積低地となり、四方を谷や低地に囲まれる地形となる。大貫台地に集中する大貫城砦群のうち、最南端の城館である。

館の縄張はやや不明瞭であるが、台地全体を城域とすれば南北約 310m、東西約 160m を測り、大貫城砦群では登城館に次いで大きい。東側・南側に土塁・堀、腰郭が断続的ではあるが遺存している。

後新古屋館の北側には龍貝館（0473）が接する。西山洋によれば、城館名となっている「後」は龍貝館の後方、「新古屋」は龍貝館より新たな館としており（HP「美浦村お散歩団」）、興味深い見識である。

後新古屋館の文献記録はないが、大貫氏の居城とされる登城館（0472）の支城として、大様・江戸氏に従属しながら涸沼川右岸の守りと固めたものと考えられる。（閑口）



後新古屋館跡縄張図 高橋宏和 2017.1.28 (手稿) より転載